

太田遺跡発掘調査概報

平成27年（2015年）3月



茨木市教育委員会



図1 太田茶臼山古墳（継体天皇陵）



図絵2 太田遺跡出土埴輪



図3 太田遺跡 古墳群築造想定図（左：安威川・正面：太田茶臼山古墳）

序 文

私たちの住むこの茨木は、大阪と京都の間の交通の要衝に位置するとともに、北半部は丹波高原の老の坂山地の麓で、南半部には大阪平野の一部をなす三島平野がひろがり、温暖な気候と豊かな自然に恵まれた過ごしやすい環境のもと、はるか昔から多くの人びとが生活を営んできました。その先人たちの足跡は、埋蔵文化財として私たちが生活する地面の下に、土に埋もれた文化財として現代に残されてきました。

このような先人たちの生活や文化は、私たちの生活の基となるものであり、また、土の中に残された遺構や遺物は、先人たちが積み重ねてきた歴史をひも解く手がかりとなるかけがえのない財産です。

しかし、本市は、近年の大規模な開発により宅地化が進み、土地利用の形態が変化したことで、これまで残されてきた多くの埋蔵文化財を現状のまま残すことが困難になってまいりました。そのため、発掘調査によって埋蔵文化財を記録保存することにより、かつてこの地に刻まれた歴史や文化を貴重な歴史文化遺産として、次世代に残し伝えていくことが、今を生きる私たちの重要な使命であると考えます。

本書は、平成 20 年度に実施した土壤改良工事にともなう太田遺跡の発掘調査成果について、概要を報告するものです。これらひとつひとつの調査の積み重ねによる成果が、郷土茨木の歴史文化遺産として広く活用されることを願ってやみません。

終わりになりましたが、調査の実施にあたりまして、惜しみないご協力をいただきました土地所有者、施工関係者、近隣住民の皆さま方に深く感謝します。また、大阪府教育委員会ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただき、今後とも本市の文化財保護行政の推進により一層のあたたかいご理解とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

平成 27 年 3 月 31 日

茨木市教育委員会

教育長 八木 章治

例　　言

1. 本書は平成20年度に実施した茨木市太田東芝町に所在する工場跡地の土壌改良工事にともなう太田遺跡（OTO8-1・2）の発掘調査概要の報告書である。
2. 現地における発掘調査は、第1次確認（試掘）調査を平成20年6月23日、第2次確認（試掘）調査を7月31日に行い、平成20年10月2日～11月6日まで第1次発掘調査、同年、9月19日・24日・26日に第3次確認（試掘）調査を行い、平成20年12月8日～平成21年3月28日まで第2次発掘調査を茨木市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査に関する協議・手続き等の業務は、地域教育振興課文化振興係（現　社会教育振興課文化財係）が行った。発掘調査は、第1次確認（試掘）調査を調査員　中東正之、第2次および第3次確認（試掘）調査および第1次・第2次発掘調査を調査員　黒須靖之が実施した。発掘調査は、施主　株式会社　東芝から株式会社　竹中工務店が受託し、安西工業株式会社が茨木市教育委員会の指示のもと実施した。
4. 現地調査の測量および図面記録作成等は、調査補助員　高瀬隆治、西井貞善、辻本祐布子、菅原麻里、中川佳恵、初代絵理、白井銀平、中澤克哉が行った。
5. 内業整理・報告書作成業務は、高橋公子、堀澤照美、下口法子、西坂泰子、和田恵津子、高瀬隆治、西井貞善、辻本祐布子、菅原麻里、中川佳恵、中澤克哉が行った。
6. 出土遺物の実測・トレースおよび原稿執筆は、調査員　関　翠が行ない、本書の執筆・編集は黒須靖之が行った。
7. 出土遺物の掲載写真は、南部裕樹氏が撮影し提供を受けた。
8. 現地調査および本書の執筆に際しては関係機関をはじめ、株式会社　東芝、株式会社　竹中工務店、安西工業株式会社から多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を表する。

凡　　例

1. 本書で使用する標高は、T.P.(東京湾標準海水面)で表記する。各挿図に掲載する表記の内、M.N.は磁北を示し、表記のないものは国土座標系第VI系〔世界測地系〕に基づく座標北を示す。
2. 遺構名称は、遺構番号の前に S D (溝)、S F (石敷)、S I (竪穴)、S K (土坑)、S P (柱穴・ピット)、S X (落込状遺構) の略称を使用している。なお、第2次本発掘調査では、調査区を A～G 区の 7 調査区に分けて調査を実施したため、遺構略称の前に各 A～G のアルファベットを付している。(例：A S D - 0 1 → A 区の溝 1)
3. 土層断面図の作成位置は、「 A — — A '」で示している。
4. 挿図および本文中の土色・土器の色調の表記は、小山正忠、竹原秀雄 編著『新版 標準土色帖』に基づく。
5. 本書の遺物番号は、通し番号であり、本文・挿図・表における番号と一致する。ただし、実測番号および遺物に記載された注記番号とは異なる。
6. 遺物の掲載図は、1／3 を基本とするが、一部の大型の遺物は縮尺を 1／4 に変更している。
7. 出土遺物および図版・写真等の記録は、茨木市立文化財資料館 [〒 567-0861 大阪府茨木市東奈良三丁目 12 番 18 号 T E L 072-634-3433] にて保管・管理している。広く活用されることを希望する。

本文目次

- 絵1 太田茶臼山古墳（繼体天皇陵）
- 絵2 太田遺跡出土埴輪
- 絵3 太田遺跡 古墳群築造想定図

序 文
例 言
凡 例

第1章 地理・歴史的環境.....	1
1. 地理的環境.....	1
2. 歴史的環境.....	1
第2章 調査成果.....	5
1. 太田遺跡と周辺の遺跡.....	5
2. 太田遺跡の発掘調査.....	8
1) 調査の経緯	8
2) 調査の概要	9
3) 基本層序	23
4) 第1次発掘調査（遺構と遺物）.....	23
5) 第2次発掘調査（遺構と遺物）.....	23
6) まとめ	26

挿図目次

図1 茨木市内遺跡分布図.....	3	図12 出土遺物1	27
図2 明治期の三島平野の地形と遺跡分布図	4	図13 出土遺物2	28
図3 太田周辺遺跡地図	7	図14 出土遺物3	29
図4 太田遺跡発掘調査区位置図.....	10	図15 出土遺物4	30
図5 第1次調査区平・断面図.....	11	図16 出土遺物5	31
図6 第2次調査区平面図.....	13	図17 出土遺物6	32
図7 第2次調査区断面図.....	15	図18 出土遺物7	33
図8 第2次調査区遺構平面図(1～3号墳)	17	図19 出土遺物8	34
図9 第2次調査区遺構断面図1	19	図20 出土遺物9	35
図10 第2次調査区遺構断面図2	21	図21 出土遺物10	36
図11 第2次調査区遺構断面図3	22	図22 出土遺物11	37
		図23 三島古墳群編年図	38

表 目 次

表1 出土遺物観察表1	39
-------------------	----

写真図版目次

図版1 第1次調査区	石敷俯瞰（南から）	45
図版2 第1次調査区	全景（西から）／石敷断面状況（北西から）	46
図版3 第1次調査区	石敷全景（西から）／遺構検出作業（西から）	47
図版4 第1次調査区	石敷全景（北から）／石積状況（北から）	48
図版5 第1次調査区	調査区全景（西から）／石敷全景（西から）	49
図版6 第2次調査区	俯瞰（北から）／俯瞰（南から）	50
図版7 第2次調査区	A・B区調査区全景（北西から）／A・B区調査区全景（西から）	51
図版8 第2次調査区	A区全景（北東から）／A区遺構検出状況（南から）	52
図版9 第2次調査区	C区俯瞰（北から）／C区全景（西から）	53
図版10 第2次調査区	C区遺構検出状況（南西から）／1号埴土層断面（東から）	54
図版11 第2次調査区	D・E区俯瞰（南から）／D・E区全景（東から）	55
図版12 第2次調査区	E区全景（南から）／G区全景（南から）	56
図版13 第2次調査区	E区全景（西から）／E～G区俯瞰（西から）	57
図版14 第2次調査区	F区全景（真上から）／9号埴全景（北から）	58
図版15 第2次調査区	D区全景（南から）／大溝〔C S D - 1〕土層断面（北から）	59
図版16 第2次調査区	C S K - 1 遺物出土状況／1号埴北側周溝埴輪出土状況（南から）	60
図版17 第2次調査区	1号埴検出状況（北から）／1号埴南側周溝埴輪出土状況（西から）	61
図版18 第2次調査区	4号埴周溝鶏形埴輪出土状況	62
図版19 須恵器壺	左 6号埴・右 12号埴／遺物番号 23・44	63
図版20 円筒埴輪	1号埴—遺物番号 83	64
図版21 円筒埴輪	2号埴—遺物番号 102	65
図版22 巫女形埴輪	2号埴—遺物番号 98	66
図版23 家形埴輪	2号埴—遺物番号 99	67
図版24 馬形埴輪	2号埴—遺物番号 100	68

第1章 地理・歴史的環境

1. 地理的環境（図1）

茨木市は淀川の北部、大阪府東北部に位置し、南北17km、東西10kmと南北に長く、東西に短い範囲を市域とし、東は高槻市、西は吹田市・箕面市・豊能町、南は摂津市、北は老の坂山地を挟んで京都府亀岡市と接する。豊能町との境には竜王山（標高約510m）や石堂ヶ丘（標高約680m）がそびえ、これらに源を発する安威川・佐保川・茨木川・勝尾寺川が市内を南流する。本市の地理的特徴は、北半部と南半西部、南半東部の三つの地域に大きく分けられ、北半部は、標高300m前後の北摂山地及び、それから派生する丘陵が占める。南半西部は、標高50～100m前後で洪積層からなる千里丘陵の裾がのびており、南半東部には、市域東部を南流する河川によって形成された沖積層からなる三島平野が広がる。

なお京都と大阪を結ぶ本市は、交通の利便さから近年人口が純増傾向にあり、都市化が急速に進む地域でもある。

2. 歴史的環境（図1・2）

茨木市内で最も古い人類の痕跡は、山麓部の初田遺跡や丘陵部裾の太田遺跡、安威遺跡などに残されている。平野部に立地する東奈良遺跡や新庄遺跡などでは、表面採集や後世の包含層内で検出された、旧石器時代後期のナイフ型石器や有舌尖頭器が認められる。

縄文時代は、東奈良遺跡から前期末頃の爪形文土器の発見をはじめ、後期から晩期になると耳原遺跡において縄文晚期の深鉢棺墓群（16基）が発見され、総持寺遺跡においても甕棺墓と考えられる土器が出土している。牟礼遺跡では、縄文晚期から弥生前期の土器や弥生前期の水田跡、井堰等が検出されるなど、茨木市域に人々が定住化する傾向がうかがえる。

弥生時代前期には、東奈良遺跡、目垣遺跡、総持寺遺跡、溝呑遺跡、新庄遺跡に集落跡がみられる。前期末には、耳原遺跡や郡遺跡にも集落が形成され、中期および後期には遺跡数が急激に増加し、倍賀遺跡、中条小学校遺跡などの河川の両岸や北部の丘陵、山地まで遺跡の分布が広がりをみせるようになる。特に東奈良遺跡は、前期末～中期初頭にかけて集落規模が最大になり、弥生時代をとおして集落が継続する。また、集落の拡大は、幾重もの環濠が中心域から外へ外へと可能な限り拡大をみせることからもうかがわれ、国の重要文化財に指定されている多数の石製銅鐸鋸型などが出土していることから、青銅器などの鋳造工房を持った拠点的な集落であると考えられている。

古墳時代になると、前期に北部の丘陵に佐保川をはさんで右岸に紫金山古墳、左岸に将軍山古墳という全長100m前後の前方後円墳が相次いで築造される。特に紫金山古墳からは、後円部中央の竪穴式石室内から、銅鏡12面や鉄製の甲のほか、鉄製刀剣、鉄鎌、鉄斧、鉄鎌、鉄製三叉鍬、車輪石、貝輪、筒形銅器などの豊富な副葬品が出土した。中期には、「繼体天皇三嶋藍野陵」に治定されている前方後円墳である三嶋最大の太田茶臼山古墳が全長226mの規模で築造される。また、総持寺遺跡内には太田茶臼山と同時期の小規模古墳43基が密集する。これらの古墳に樹立される埴輪は、いずれも高槻市新池埴輪窯で製作されたものである。後期

には、茨木市内の古墳築造が全盛を迎える。南塚古墳や青松塚古墳、海北塚古墳は、甲冑や装飾付大刀、金銅装の馬具などを副葬する有力墳として著名である。南塚古墳は全長50mの前方後円墳であり、三島地域で最古の横穴式石室を主体部とする。耳原古墳は、三島地域最大の横穴式石室を主体部とする円墳で玄室奥には蓋に計6個の縄掛突起を持つ家型組合式石棺、羨道近くには蓋に計2個の円形突起を作り出す家型剝抜式石棺といった形式の異なる2基が安置されている。そのほか終末期古墳として、阿武山古墳や初田1号墳、上寺山古墳がある。阿武山山頂近くの南斜面（標高214m）に位置する阿武山古墳は、墓域は高槻と茨木の市境にまたがるが、石室は高槻市側にある。石室内には麻布を漆で塗り重ねてつくった夾紵棺が安置され、棺のなかには、玉枕や金糸などが副葬され、藤原鎌足の墓とみる意見がある。

市内に築かれた古墳は200基以上にもおよび、新屋古墳群、安威古墳群、長ヶ淵古墳群、桑原古墳群など横穴式石室を主体とする群集墳が山裾部を中心に築造される。また、低位段丘から平野部においては、太田古墳群（今回調査）、総持寺古墳群、中条小学校遺跡、東奈良遺跡、郡古墳群などのように、横穴式石室を持たない直葬の古墳群が多くみられる。

古代の飛鳥時代には、太田廃寺・穗積廃寺・三宅廃寺などの有力氏族寺院が建立された。とくに太田廃寺からは、塔婆心礎とその内部に納められた舍利用器一式、複子葉弁軒丸瓦・忍冬唐草文軒平瓦などが出土している。奈良時代になると、摂津は12の郡に分けられ、茨木市域は摂津国嶋下郡に編成される。嶋下郡は、新野・宿人・安威・穗積の四郷からなり、現在でも市内には郡や郡山という地名が残る。平城遷都にともない、嶋下郡には「殖村駅」が置かれ、茨木市域は宮都から難波や山陽・西海道諸国への公的な通路となる。この通路は、近世の西国街道や現代の名神高速道路などにもつながり、本市の交通の要衝たる特徴は、その地形的特色から古来以来脈々と受け継がれている。平安時代の茨木市域の多くは、藤原氏の荘園であったことが文献に記される。また、中納言 藤原山蔭創建の総持寺など、山林寺院である忍頂寺など多くの寺院が存在したことが知られる。さらに、『延喜式』には、嶋下郡に13社もの神社がみられ、これは『弘仁式』にまでさかのぼると考えられている。このように、多くの寺社が市内全域にわたってみられ、古代以来の信仰という側面も本市の歴史を考える上で、たいへんに重要な視点である。

「いばらき」の地名がみえる文献上の最も古い記録として、鎌倉初期の正治元年（1200）11月3日の神国正田地売券に「嶋下郡中条茨木村四条七里六坪」がある。

中世の遺跡としては、東奈良遺跡や中条小学校遺跡、舟木遺跡、新庄遺跡、玉櫛遺跡、郡遺跡、総持寺遺跡などの集落遺跡が挙げられる。さらに、中世から近世初頭の遺跡には、茨木城、三宅城、福井城、安威城、郡山城、泉原城、太田城、目垣城などの城郭があるとされるが、その全容は不明ことが多い。現在の茨木市中心部となっている茨木川沿いには、茨木城が築かれた。その城主は、茨木氏、中川氏、片桐氏と変遷するなか、城の規模や有り様も変化したと考えられ、一国一城令により廃城になった後も、現在に至るまで水路や地割等に影響している。しかしながら、茨木城や廃城後の近世在郷町の実態はなお不明な点が多く、発掘調査によって得られる知見は、その解明において重要である。

近世には西国街道沿いに、唯一残る国史跡 郡山宿本陣がいまなお残されており、往時を偲ばせる佇まいをみせる。

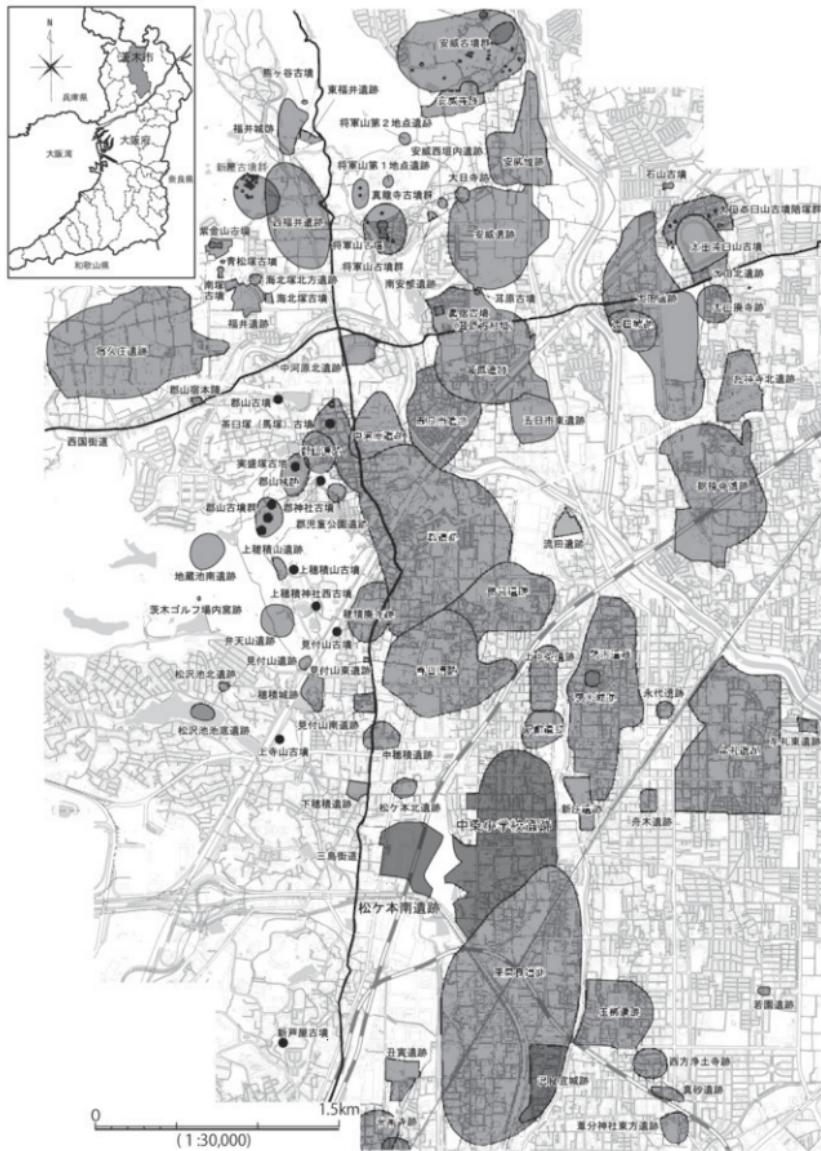


図1 茨木市内遺跡分布図

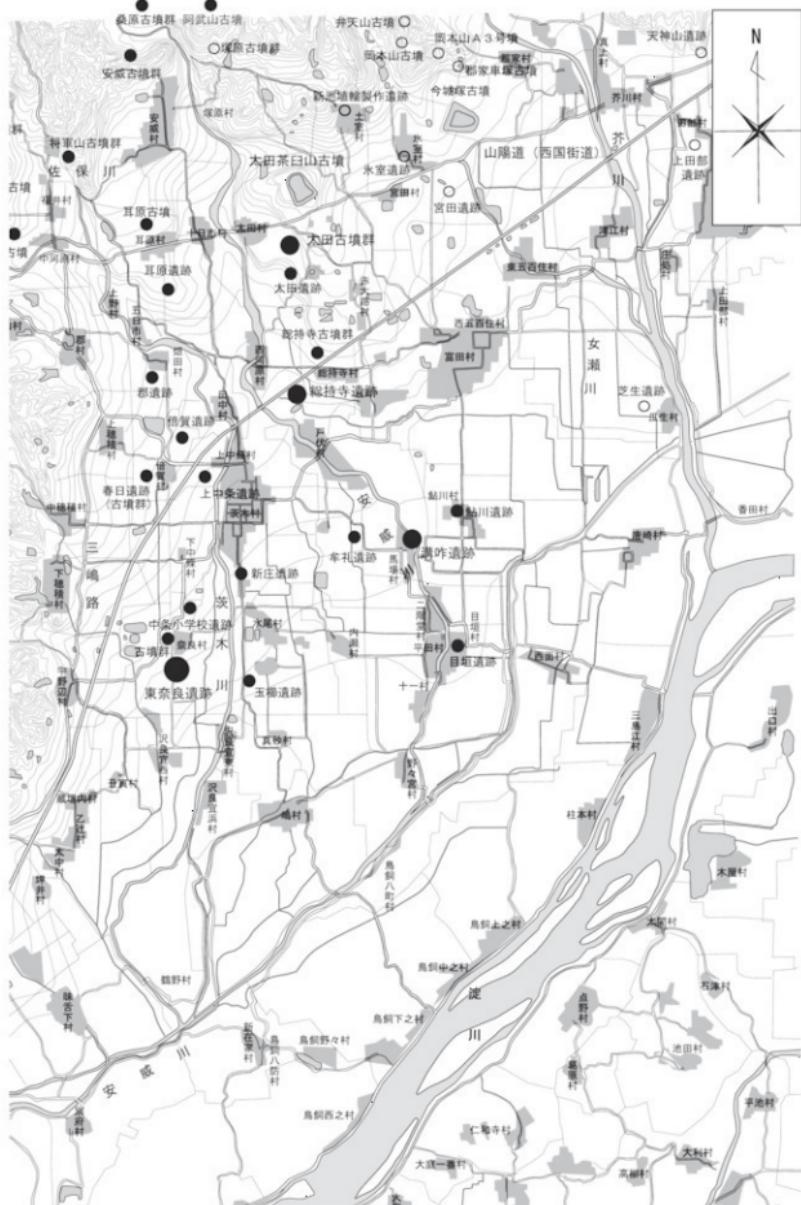


図2 明治期の三島平野の地形と遺跡分布図

第2章 調査成果

1. 太田遺跡と周辺の遺跡（図3）

太田遺跡 阪急京都線持寺駅の北西 500 m、富田台地の段丘西側沖積面に立地し、花園1丁目・太田2丁目・太田東芝町の南北 1.7km・東西 0.6kmの範囲に広がる弥生時代～中世の複合遺跡である。1973年（昭和48年）、東太田一丁目での大阪府教育委員会による発掘調査にはじまり、遺跡南端付近において、寮建設に伴う発掘調査を本市が1985年（昭和60年）に実施し、竪穴式住居や溝、土壤、柱穴が検出され、弥生土器と須恵器が出土したことから遺跡の南側では弥生時代～古墳時代の遺構が広がっていることがわかった。また、1999年（平成11年）、遺跡北側の共同住宅建設に伴う調査では弥生時代後期の竪穴式住居や古墳時代の建物跡などを確認した。

太田遺跡（太田北古墳群） 1994年（平成6年）、太田遺跡の北端に位置する太田茶臼山古墳の西に隣接した場所で、名神高速道路の拡幅工事に伴う調査で、石室を伴う4基の古墳と1基の円筒埴輪棺が発見された。古墳の残存状態が悪いため、墳形は不明である。円筒埴輪棺は3個の円筒埴輪が使われ、3本の突帯をもつ小型品で口縁部に矢印状のヘラ記号を施しており、同様の記号が須恵器に付されたものが郡遺跡（平成14年度）から出土している。高槻市新池遺跡のC群窯の18号窯出土埴輪と酷似し、円筒埴輪編年Ⅴ期に位置付けられる。

太田茶臼山古墳（繼体天皇陵三嶋藍野陵） 太田遺跡北東の太田3丁目地内に築造された墳丘全長 226 m・前方部幅 147 m・前方部長 117 m・前方部高 19.8 m・後円部径 138 m・後円部高 19.2 m・濠幅 28 ~ 33 mを測る前方後円墳で、淀川右岸では最大規模を誇る。墳丘は3段築成でくびれ部には造出しがみられ、周囲は周濠がめぐり、さらにこれを取り囲むように幅30 m程度の周堤がめぐる。繼体天皇陵として宮内庁が治定・管理しており、下記に示すとおり、これまでの調査により出土した埴輪から円筒埴輪編年のⅣ期に属するため、古墳時代中期中葉（5世紀中葉）であるとされ、墳丘や埴輪の特徴から繼体大王の没年よりも半世紀以上前に築造されたと古墳である。このことから、眞の繼体天皇陵は高槻市郡家の今城塚古墳が有力視されている。

（既往調査）

- | | |
|-------------------|------------------------------------|
| 1959年（昭和34年） | 名神高速道路建設のため事前地形実測調査。 |
| 1972年（昭和47年） | 大阪府教委 古墳北西部外周調査。（円筒埴輪列検出） |
| 1984年（昭和59年） | 宮内庁 見張所調査。（書陵部紀要37号） |
| 1986・7年（昭和61・62年） | 宮内庁 外堤護岸工事に伴う調査。（書陵部紀要39・40号） |
| 1988年（昭和63年） | 茨木市教委 西南部外周・公民館建設工事に伴う調査。（円筒埴輪列検出） |
| 1993・5年（平成5・7年） | 茨木市教委 南部外周・民間事業に伴う調査。（埴輪片・須恵器出土。） |
| 2002・3年（平成14・15年） | 宮内庁 外堤護岸工事に伴う調査。（書陵部紀要55・56号） |

太田石山古墳 太田茶臼山古墳の北西約 200 m の花園 2 丁目地内に築造された古墳で、1967 年（昭和 42 年）に部分的なトレンチ調査、1986 年（昭和 61 年）に発掘調査が実施された。調査の結果、円形にめぐる埴丘裾部の葺石と周溝が検出されたものの、全体の 4 分の 3 が失われていたため、墳形が前方後円墳または径 28 m の円墳と考えられている。出土遺物は、鉄斧、鉄鎌、鉄刀、円筒埴輪、家形埴輪、蓋形埴輪などがあり、円筒埴輪編年のⅢ期に位置付けられるとしており、築造は中期前葉（5 世紀前葉）とされている。

太田北遺跡 太田遺跡の東に位置し、太田茶臼山古墳の外周を開む古墳時代～中世の複合遺跡で、1988 年（昭和 63 年）、太田茶臼山古墳の前方部南西端に近接する場所で公民館建設にともなう発掘調査で、円筒埴輪列が発見された。この調査により、周濠の南側にも堤（周堤）があることが確定となった。その後、同様に太田茶臼山古墳前方部中央やや東よりの場所で、1993 年（平成 5 年）および 1995 年（平成 7 年）に発掘調査を実施したが、落ち込みから中世の瓦質土器とともに円筒埴輪が出土したものの埴輪列は確認されなかった。この前方部に面した周堤出土の円筒埴輪は、円筒埴輪編年のⅣ期に属し、古墳時代中期中葉（5 世紀中葉）に位置付けられる。

太田廃寺跡 太田遺跡東側の段丘崖上、太田茶臼山古墳南側の同一段丘面の東太田 2 丁目に位置するおよそ東西南北 200 m の範囲に広がる古代の寺院跡である。1907 年（明治 40 年）に舍利容器一式（重要文化財・東京国立博物館所蔵）を納めた塔婆心礎が発見された。また、複子葉弁文端丸瓦・忍冬唐草文端平瓦が見つかるなど太田廃寺の創建は飛鳥時代後期（天武朝 672 ～ 686 年）頃と推定されている。

太田城跡 太田遺跡の西に隣接する太田 1 丁目に位置し、およそ東西南北 150 m の範囲に広がる平安時代末（12 世紀末）頃に築かれた平城と推察されている。安威川左岸沿いで集落の中央を西国街道が横断する。多田源氏の太田太郎頼基が城主の頃、源頼朝から追われ都から西国街道を西へ落ちのびていく源義経と河原津（安威川 - 太田橋付近）で一戦を交えたとされる。

総持寺北遺跡 太田遺跡の南東、総持寺遺跡北側の東太田 3 丁目・三島丘 2 丁目に位置し、およそ南北 450 m ・東西 300 m の範囲に広がる古代～中世の集落遺構が中心となる遺跡である。1994 年（平成 6 年）、高層住宅建設にともない、現（公財）大阪府文化財センターが、国道 171 号線南側に面する発掘調査を実施した結果、飛鳥時代～鎌倉時代（7 ～ 14 世紀前葉）の建物群を中心とする遺構が多数検出され、烏帽子が出土した。また、遺跡北端では、1995 年（平成 7 年）、1996 年（平成 8 年）、2001 年（平成 13 年）に本市が発掘調査を実施し奈良時代末～平安時代中期（8 ～ 10 世紀）の建物跡を中心とする遺構を検出し、太田廃寺所用とみられる重弧文軒平瓦や円面鏡が出土している。

総持寺遺跡 総持寺遺跡は太田茶臼山古墳、太田北遺跡、太田廃寺跡、総持寺北遺跡とともに北摂山地から派生した下位段丘上の「富田台地」と呼ばれる上に立地する。この富田台地は南東に向かって緩く傾斜しながら大きく舌状に張り出し、東西約 2km 、南北約 2.5km の広大な段丘面を形成し、標高は 15 ～ 30 m を測る。遺跡の西側には比高 5 ～ 6 m の段丘崖を介して安

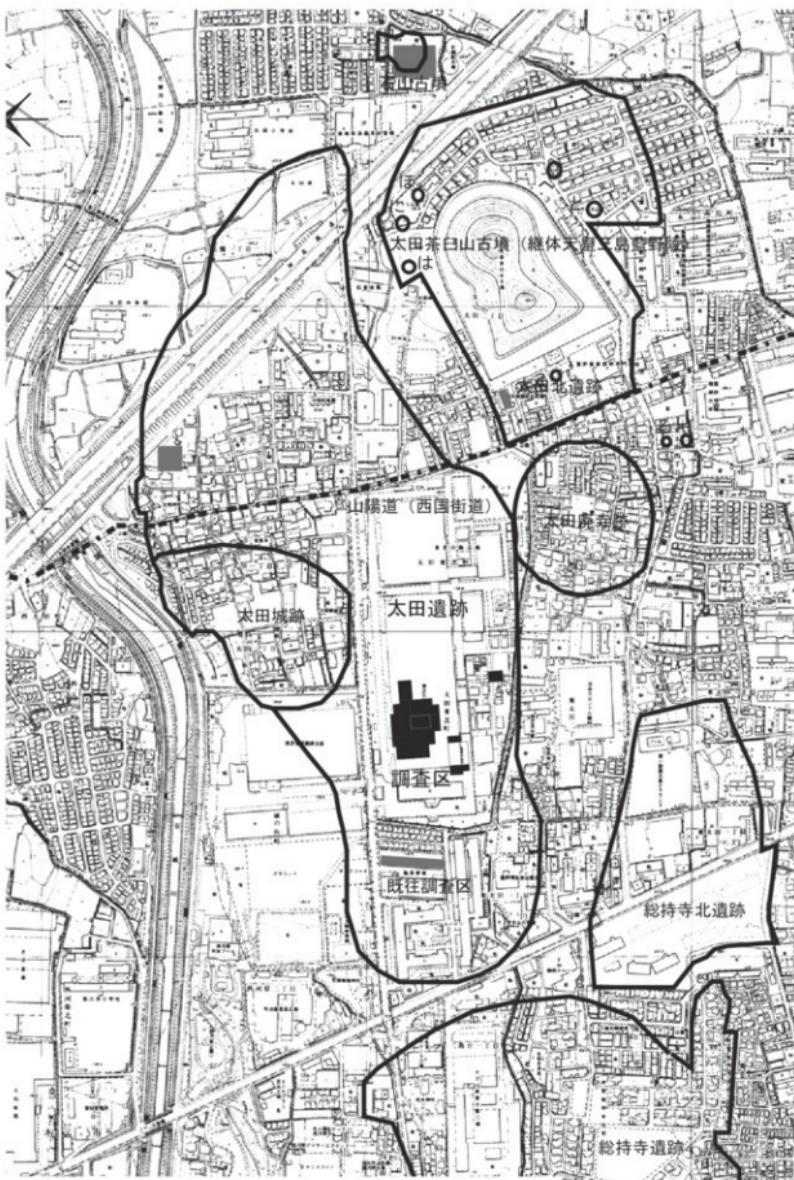


図3 太田周辺遺跡地図

威川が造りだした沖積地が広がり、東側は女瀬川・芥川が開析し、同じく南側には沖積平野が広がる。総持寺遺跡の主だった部分は、安威川左岸沿いの富田台地南西部に位置する。遺跡の範囲は東西約 550m、南北約 850m におよび、弥生時代～中世に至る複合遺跡である。総持寺北遺跡を含む台地上の北側では、飛鳥時代～平安時代前期頃（7～9世紀）の建物跡が 200 棟以上発見され、硯・墨書き土器・石製巡方・圓足円面硯・博・『調』とヘラ書きされた須恵器が出土した。続く平安時代中期～鎌倉・室町時代を通して大規模な集落が存続する集落遺構が中心であるのに対し、南側の台地先端付近は古墳群が広がっている。さらに遺跡の西側、段丘崖下の沖積面には、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての溝（水路）を中心とする遺構や中世の耕作溝が広がる。

総持寺遺跡（総持寺古墳群） 太田遺跡の南、三島丘 1・2 丁目・総持寺 1 丁目・総持寺駅前町・庄 1 丁目に広がる弥生時代～中世の複合遺跡で、富田台地の南西端に位置し、段丘下の沖積面では、弥生時代後期の集落や古墳時代の祭祀関連遺構、中世の耕作溝（莊園）が複数面発見されるなど、古くから土地利用が活発な場所である。

比高差 7 m 前後の段丘崖に面する台地先端では、府営住宅の建て替えに伴う大阪府教育委員会の発掘調査で、方墳主体の 43 基の古墳が発見された。43 基の古墳のうち、4 号墳のみ円墳で他はいずれも方墳であった。墳丘は最大でも一辺 15 m 前後で上部が削平されており、埋葬施設は失われていたものの、周溝から須恵器や埴輪が出土し、5 世紀前葉から中葉にかけて築造された古墳群であることが判明している。古墳群から出土した埴輪の多くが、太田茶臼山古墳の埴輪を焼成した高槻市新池埴輪窯（A 群窯）で生産されたもので、太田茶臼山古墳と総持寺古墳群の密接な関係性が指摘されている。さらに、太田茶臼山古墳の円筒埴輪は 4 条の突帯 5 段の埴輪を基調とし、総持寺古墳群の円筒埴輪は 2 条の突帯 3 段の小型品である。

2. 太田遺跡の発掘調査

1) 調査の経緯

今回の調査は、東芝家電製造株式会社大阪工場移転による土壌改良工事にともなう発掘調査である。平成 20 年 6 月 10 日に工場建物解体工事および土壌改良工事を受注した株式会社 竹中工務店からの調査依頼の提出を受けて、工場解体にあわせ同年 6 月 23 日に構内通路や植栽部分の計 9 カ所で第 1 次の確認調査を実施した。その結果、現地表面下 0.65～1.7 m の深さで、4 カ所のトレンチから遺物包含層および遺構面を確認し、北側に設定したトレンチは遺構面までの深さは浅く、敷地南側に移動するにつれ遺構面まで深いことが判明した。さらに、同年 7 月 31 日に敷地中央東側部分（14 号棟）で土壌改良工事のため、東西に 3 カ所のトレンチを設定して確認調査を行ったところ現地表面下 0.85～1.2 m の深さで、2 カ所のトレンチから遺構が確認されたため、第 1 次発掘調査を実施することとなった。

また、解体工事が進んだ第 1 工場内の土壌改良工事部分において、同年 9 月 19 日、24 日、26 日に 10 カ所のトレンチを設定し、第 3 次確認調査を実施した。その結果、現地表面下 0.7～2.1 m の深さで、1 カ所を除くすべてのトレンチで遺構および遺物包含層を確認した。ここでも、第 1 次確認調査同様、敷地南側に移動するにつれて遺物包含層および遺構面まで深いこ

とが確認された。

第1次発掘調査は、調査面積364m²を平成20年10月2日～同年11月6日までの期間で実施した。調査終了後、第1工場内の第2次発掘調査について、平成20年10月30日に大阪府教育委員会文化財保護課と協議を行った。協議内容は環境モニタリングの結果、一部、重金属・VOC汚染土が検出された箇所について、健康への配慮から発掘調査を除外することについて協議を行った。結果、当該箇所を調査対象外にすることは可としたうえで油汚染土の箇所については、対策を講じたうえで第1工場内の発掘調査を実施するよう見解が示された。本市の環境担当課からも健康への配慮について、土壤汚染対策法に基づく調査および工事を行ううえでの留意事項が示されており、発掘調査もこれに準じて行うこととなったことから、その後、事業者と協議を行い、周辺住民へ埋蔵文化財発掘調査のお知らせ及び発掘調査範囲を山留にて遮水壁を構築するなど、第2次発掘調査の準備が進められた。

第2次発掘調査は、上記の協議・対策を踏まえ調査面積6,010m²を平成20年12月8日～平成21年3月28日までの期間で実施した。発掘調査は、①粉じん対策、②作業員や機材に付着した油汚染土壤の持ち出しの禁止、③排水・雨水対策、④悪臭対策、⑤環境監視のもと定期的に発注者・施工関係者との協議を実施しながら安全に配慮して進められた。油汚染土壤は地点により濃度・深度が異なるため、場外処分や改良処理など細かく決められており、重機による表土掘削作業は掘削深度を常に計測しながら土を分別し、さらに無数にある環境モニタリングの監視井戸を避けるなど困難を極めたが、関係者一同の協力により発掘調査は順調に進んだ。

2) 調査概要(図4)

今回の発掘調査の調査区は敷地南半に集中し、東側の段丘崖付近の第1次調査区(14号棟)と第1工場地内の第2次調査区である。第2次調査区では工事工程と調整した結果、調査区をA～G区の7調査区に設定し、発掘調査はA～Gのアルファベット順のとおり進めた。敷地が広大であるため、第1次調査区と第2次調査区では東西に80m、第2次調査区は北に位置するC区からG区南端までは120mほどの距離がある。調査地は工場として利用する際にもともと緩斜面であった場所を整地したもので、調査結果からも緩斜面であったことが裏付けられた。いずれも遺物包含層下の地山面で、C区北側が標高19.6m、A区が標高18.1m、B区西側が標高17.9m、東側が標高18.5m、F区南側が標高18.4m、G区南側が標高18.3mであった。このことから、第2次調査区の南北120mの距離で1.3mほど南に低く、東西80mの距離で0.3mほど東に低い。また、東側の第1次調査区では西側が標高19.0m、東側が標高19.4mを測る。

第1次および第2次調査区は、第1面で平安時代後期～鎌倉時代の耕作溝や柱穴を検出し、第2面では弥生時代の土壤や溝、古墳時代中期の埋葬施設が削平された円墳5基・方墳7基、奈良時代～平安時代前期の南北にのびる石敷遺構や同じく南北にのびる大溝、建物を構成する柱穴など同一面に3時期の遺構を検出した。

出土遺物は、弥生時代後期の甕や石斧、古墳時代中期の円筒埴輪や形象埴輪(巫女型・人物頭部・馬・鶴・家)・須恵器・土師器、飛鳥～奈良時代の須恵器・土師器・平瓦、平安時代～鎌倉時代の綠釉陶器・黒色土器・土師皿・瓦器椀などがあり、遺物収納コンテナ127箱分の遺物が出土した。



図4 太田遺跡発掘調査区位置図

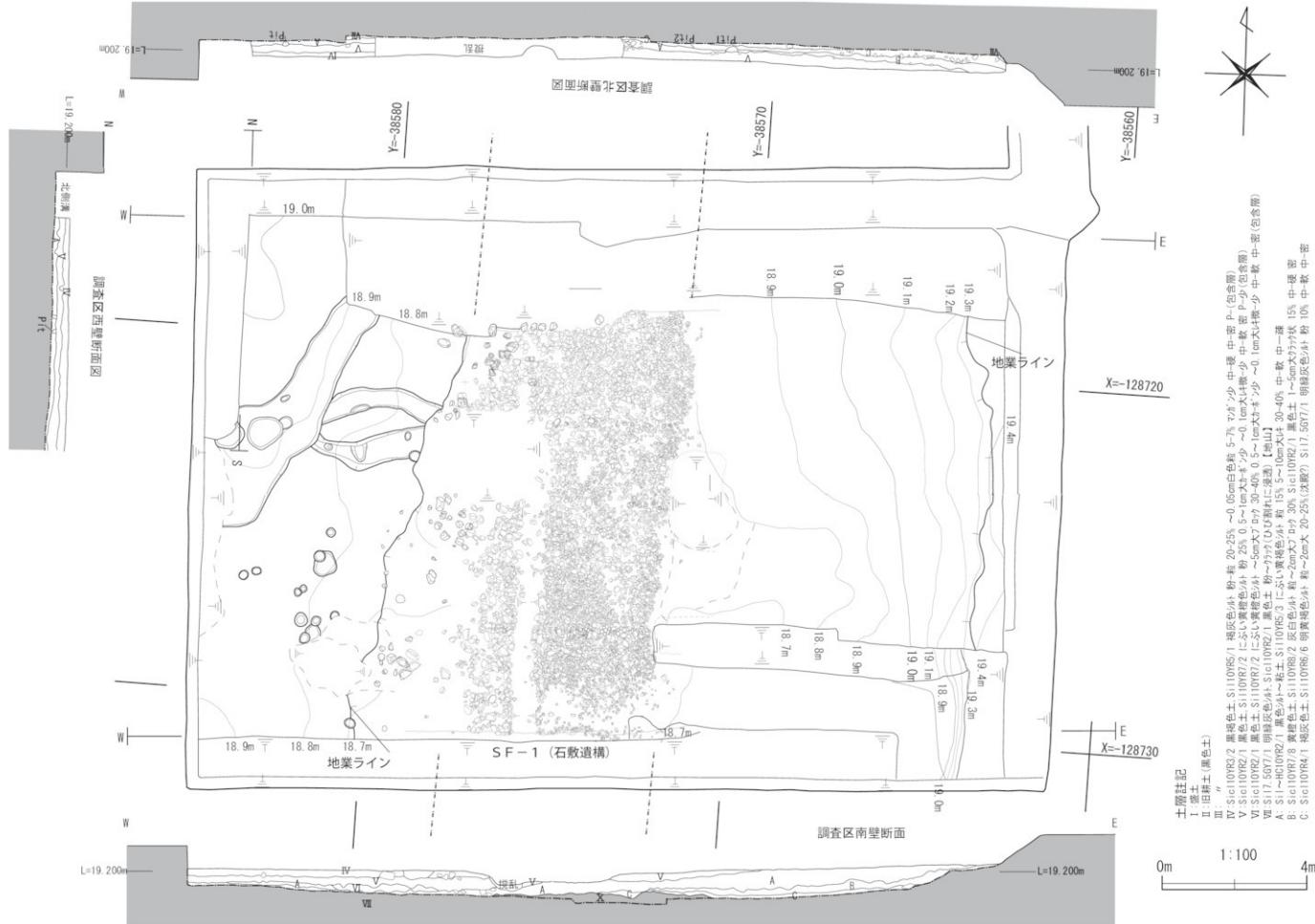


図5 第1次調査区平・断面図

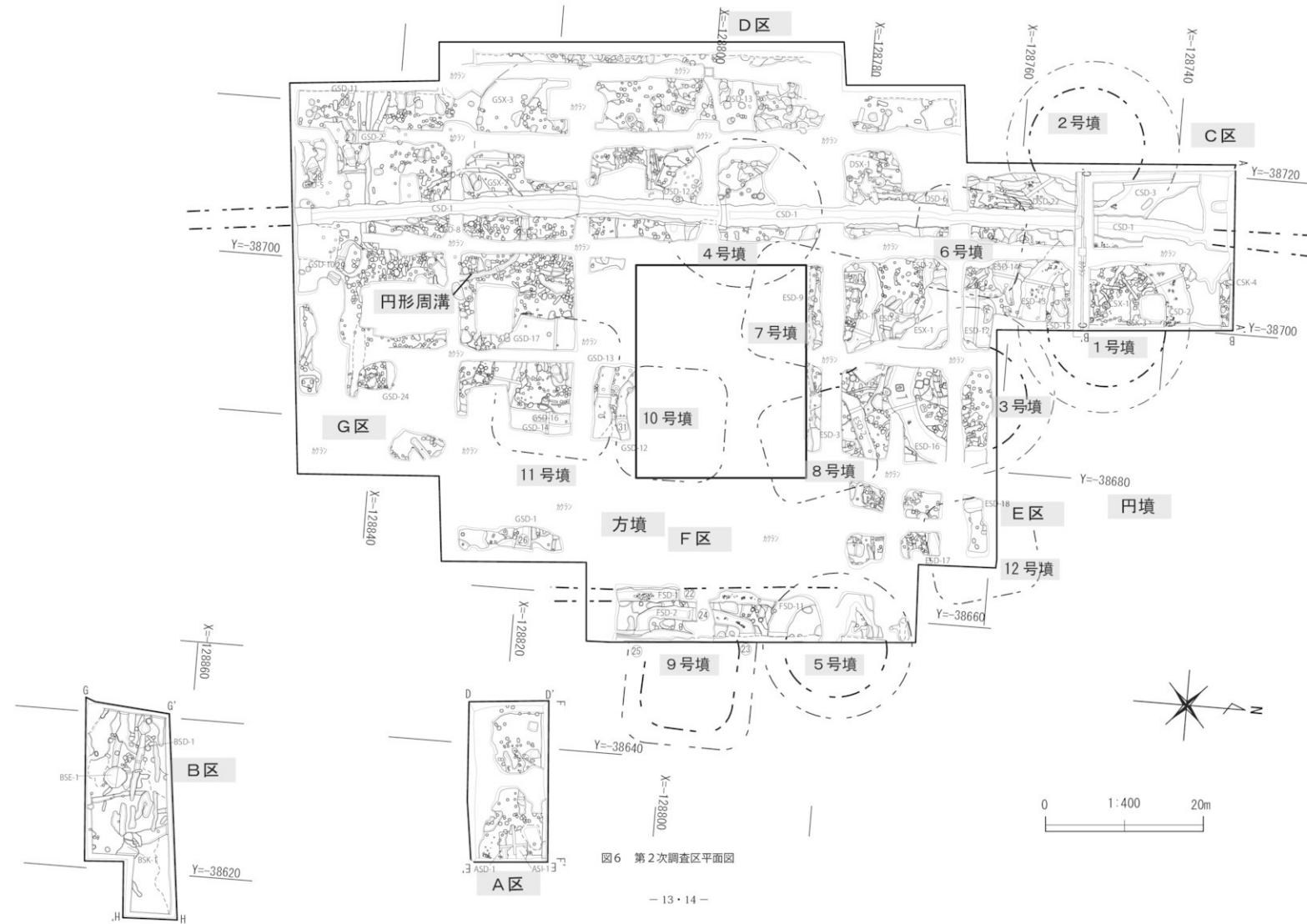


図6 第2次調査区平面図

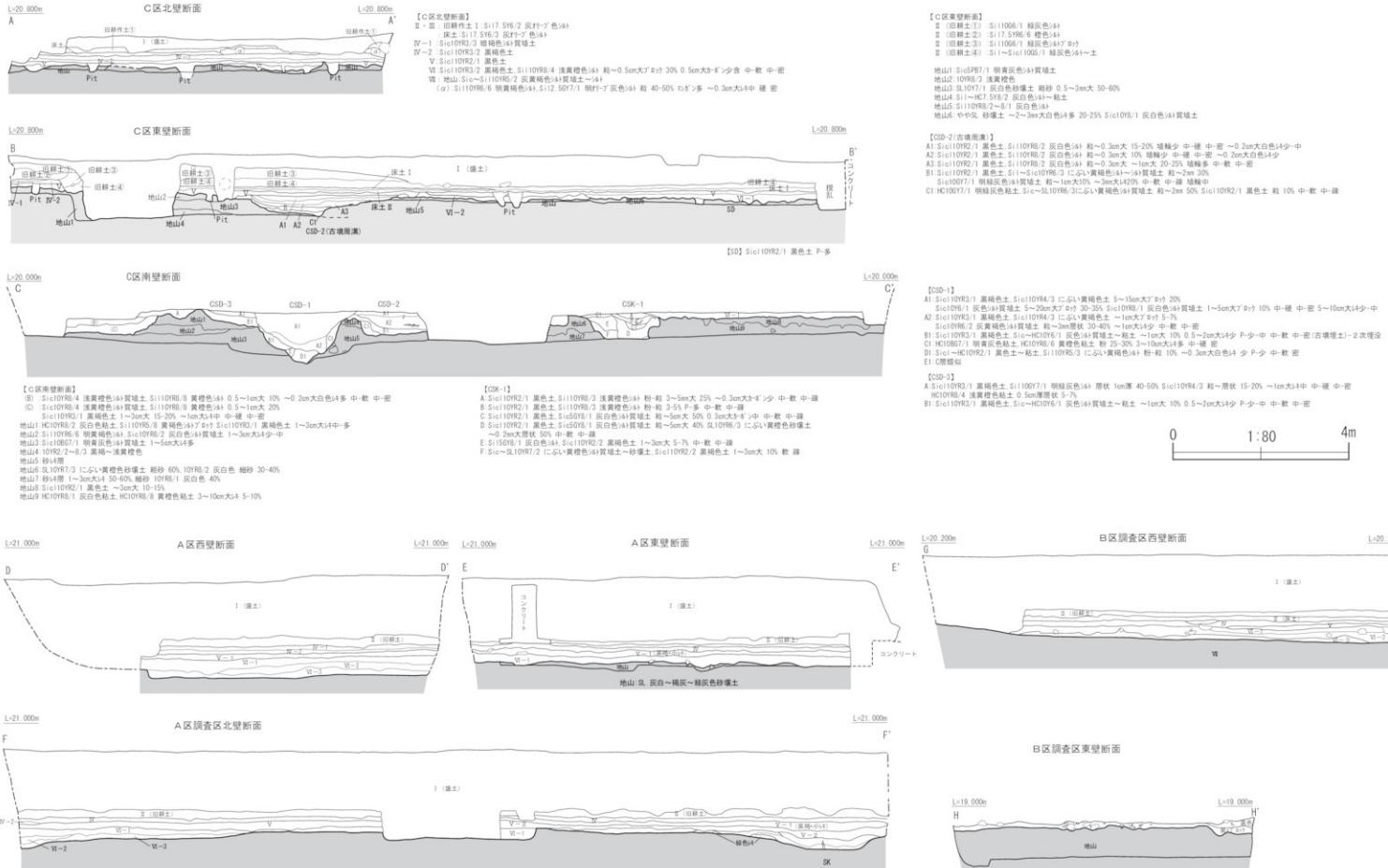


図7 第2次調査区断面図

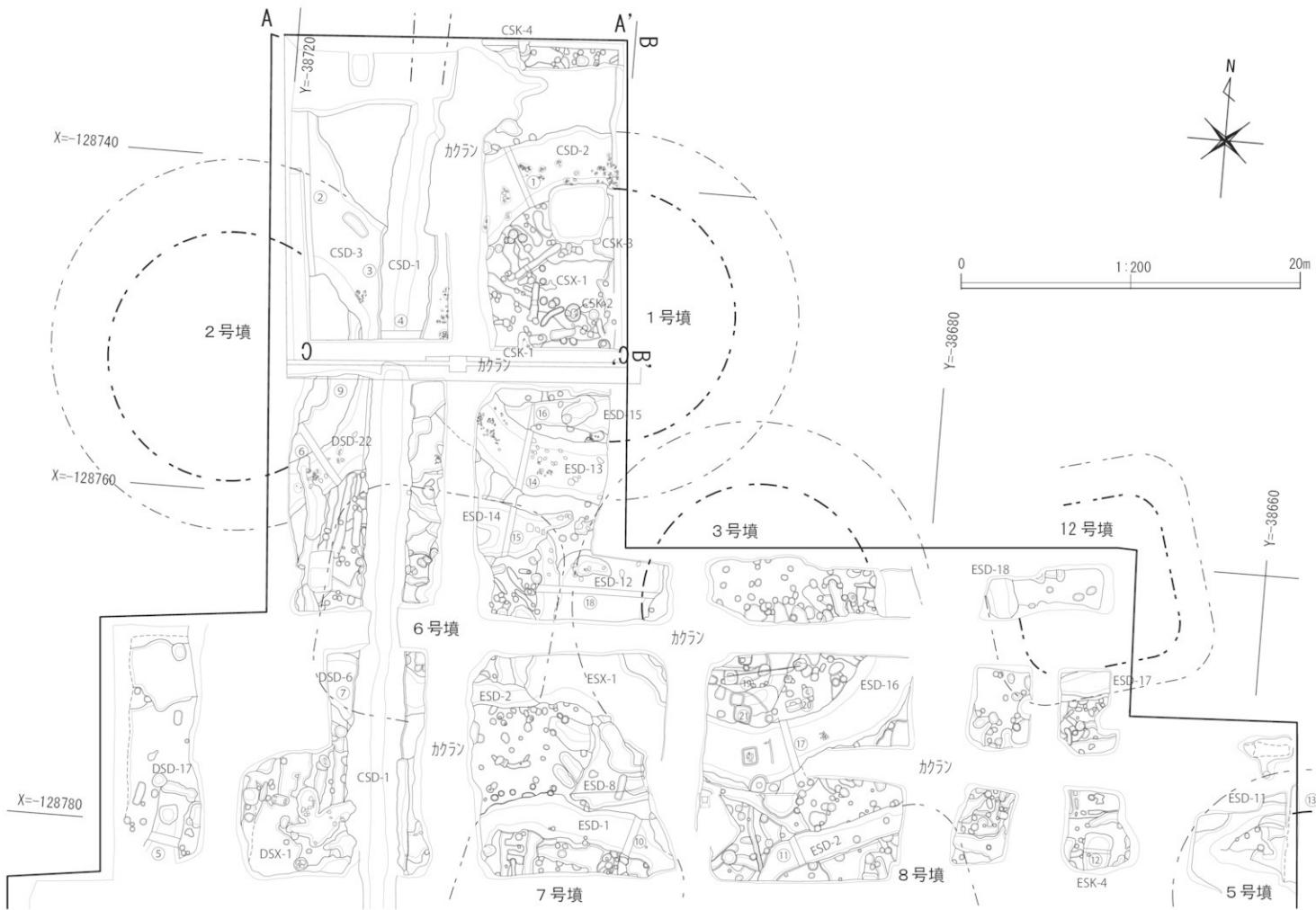
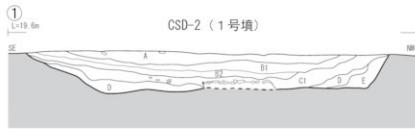


図8 第2次調査区遺構平面図（1～3号墳）

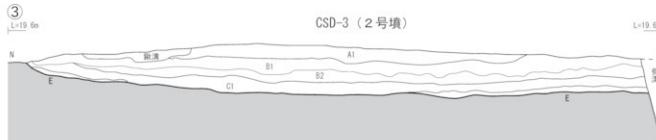


CSD-2 (1号墳)

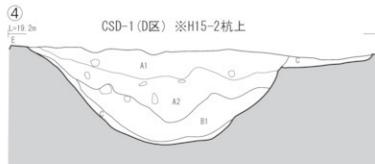


32-1(1)号
[S1]S109/2 黑褐色土, S1-S109/4-2 黄褐色土 粒-0.5mm 25-30% ~0.3mm白色少-中 植物残-少 中 疏
[S1]S109/2 黑褐色土, S1-S109/4-2 黄褐色土 粒-0.5mm 25-30% ~0.3mm白色少-中 植物残-少 中 疏
[S1]S109/2 黑褐色土, S1-S109/4-2 黄褐色土 粒-0.5mm 25-30% ~0.3mm白色少-中 植物残-少 中 疏
[S1]S109/2 黑褐色土, S1-S109/4-2 黄褐色土 粒-0.5mm 25-30% ~0.3mm白色少-中 植物残-少 中 疏
[S1]S109/7.2 黑褐色土, S1-S109/7.2 黄褐色土 粒-0.5mm 10-15% ~0.1mm白色少-中 植物残-少 中 疏
[S1]S109/7.1 黑土, S1-S109/4.7 黄褐色土 粒-0.5mm 10-15% ~0.1mm白色少-中 植物残-少 中 疏
[S1]S109/7.1 黑土, S1-S109/7.3 [黄褐色土] 粒-0.5mm 2-30% ~0.3mm白色少-中 P-中 植物残-少 中 疏
[S1]S109/2-1 黑土, S1-S109/2.3 [黄褐色土] 粒-0.5mm 2-30% ~0.3mm白色少-中 P-中 植物残-少 中 疏
[S1]S109/2-2 黑土, S1-S109/2.3 [黄褐色土] 粒-0.5mm 2-30% ~0.3mm白色少-中 P-中 植物残-少 中 疏

B2-C1から複数多(ヘラ描絵)



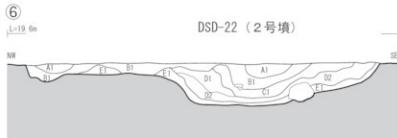
CSD-3 (2号填)



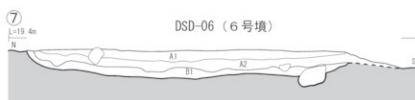
CSD-1(D区)※H15-2杭上



DSD-22 (2号墳)



[DSB-22 (等) 順序] 1. Al*s15057*/1.2 粉紅色/4b. Si*cl100y*/2.2 灰褐色黃土 粒-層狀 5-7% ~0.3cm大白色10 中-硬 中-密
 2. Ci*s1027*/1.2 黑褐色土. Si*cl100y*/2.2 灰褐色黃土 粒-帶狀 0.1-0.4cm大白色15-20% P-少 硬
 3. Ci*s1027*/1.2 黑褐色土. Si*cl100y*/2.2 灰褐色黃土 粒-層狀 0.1-0.4cm大白色15-20% P-少 硬
 P-少 中-凹陷. 人物頭髮. 犀牛頭骨. 6C 2.0cm白色24 5-10% 中-硬
 4. Di*s1027*/1.2 黑褐色土. Si*cl100y*/2.2 灰褐色黃土 粒-層狀 0.1-0.4cm大白色15-20% P-少 硬
 5. Si*cl100y*/2.2 白色粘土. Si*cl100y*/2.2 黑褐色黃土 粒-層狀 0.1-0.4cm大白色15-20% 硬
 P-少



DSD-06 (6号機)



DSD-12 (4号)

【DSD-06 (6号等)】
 A1. Sic110YRz/1 反白色土. Si110YRz/2 反黄褐色土 粒~0.2mm大 15-20% 0.2~0.5mm大白色土 4~25% 中-细
 A2. Sic110YRz/1 黑色土. Si110YRz/3 にぶい黄褐色土 粒~0.2mm大 10% 0.2~0.5mm大白色土 色~中 10% P-中
 R1. Sic110YRz/1 黑色土. HC110YRz/1 深灰色黏土 粒~3mm大 5-10% 0.2~0.5mm大白色土 15-20% 中-细

D区北陸2:造機版面

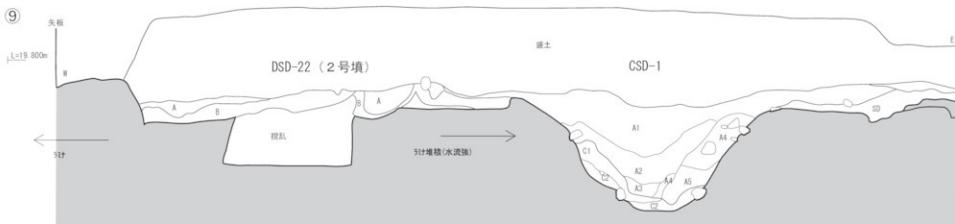


図9 第2次調査区遺構断面図 1

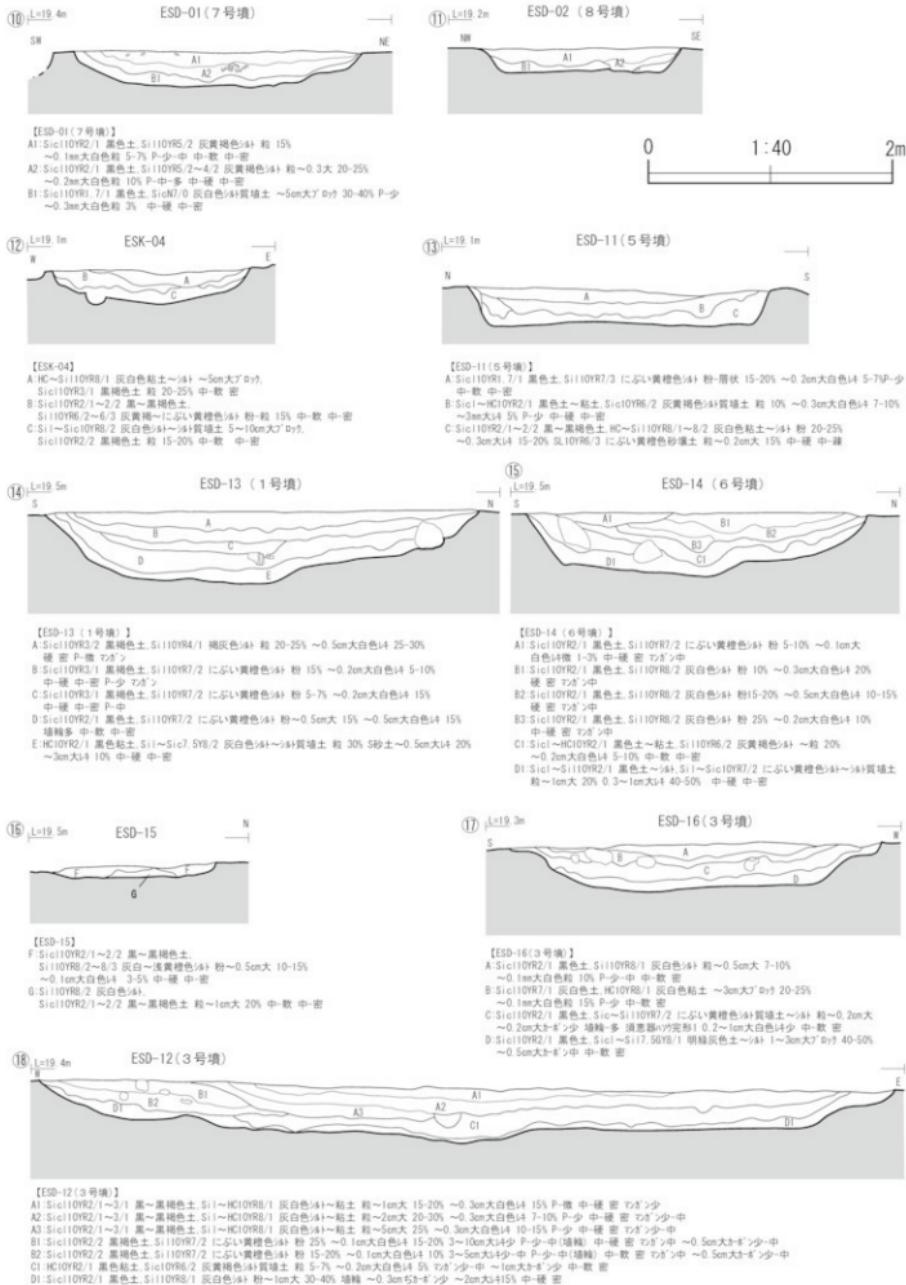


図 10 第2次調査区構造断面図

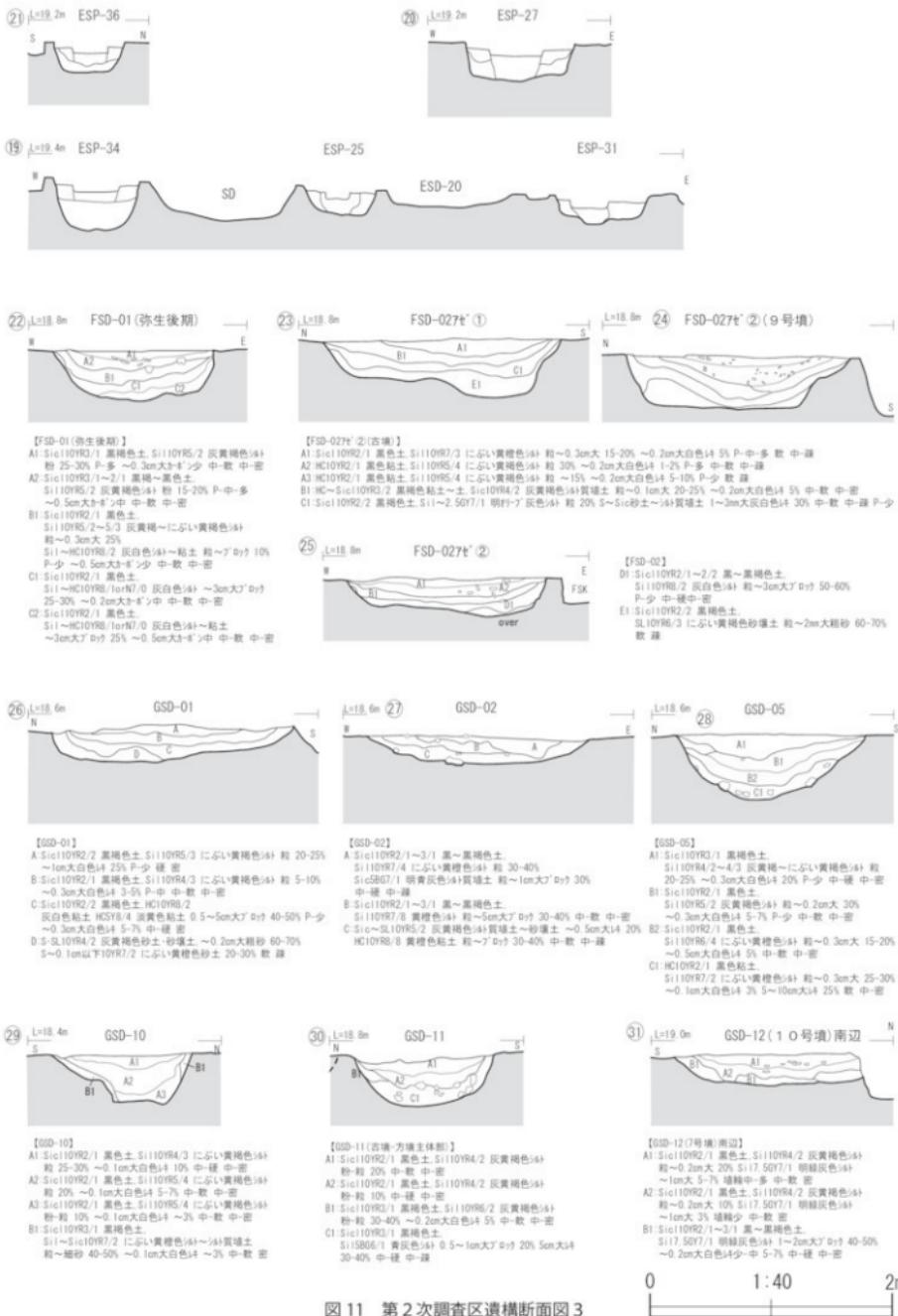


図 11 第 2 次調査区遺構断面図 3

3) 基本層序（図5・7）

地形的に北から南に向かって緩やかに傾斜するため、南側の調査区では遺物包含層等が厚く堆積する傾向が見られる。上から順に、第I層（盛土層）はA・B区では層厚130～150cm、C区で層厚20～70cm、第1次調査区では層厚60～90cmを測る。第II・III層（旧耕土1～4・床土）はA・B区では層厚15～30cm、C区で層厚50～65cmを測る。

第IV層～第VI層は遺物包含層で、第IV層（平安時代中期～後期遺物包含層）は黒褐色～暗褐色土で層厚10～20cmを測る。第V層（平安時代中期）は黒色土でぶい黄橙色シルトと遺物を僅かに含む。第1次調査区では層厚30cm、A～C区で層厚10～20cmを測る。第VI層（平安時代前期）は第V層同様に黒色土でぶい黄橙色シルトブロックをやや多く含み、遺物を僅かに含む。層厚は第1次調査区では20cm、A・B区では40cmの層厚があり、さらに3層に細分される。C区では層厚10～15cmを測る。第VII層（地山）は明緑灰色シルト～灰白色シルト又は粘土である。

4) 第1次発掘調査（図5）

第1次調査区では、現地表面下0.6～0.8m（標高19.2～19.4m）の第1面で、中世の耕作溝を検出した。瓦器碗等の出土遺物から鎌倉時代頃と推察される。直下の0.4～0.5mほどの遺物包含層（IV～VI層）下で、第2面の遺構を検出した。（標高18.9～19.3m）遺構は調査区西端で柱穴や溝、隣接して東側は、南北に延びる10～40cm大の石を多量に敷き詰めた石敷遺構（SF-01）を検出した。石敷遺構（SF-01）は幅5～6mで、全長は12.0m以上、ほぼ座標北に沿って延びる。そのまま北に進むと太田茶臼山古墳（継体天皇陵）の南西端手前で旧山陽道（西国街道）に交わる。検出状況時においては、遺物包含層又は大溝とみえたが、埋土を掘削していくと調査区東端では、溝の片側ラインと緩やかな壁・底面があらわれた。また、調査区中央付近を掘り進めると石が集中してみられるようになった。埋土はA～C層の3層で、A層は黒色シルト～粘土で部分的に多量の礫を含む。層厚は厚いところで50cmほどで遺物を伴う。B層は黄褐色土に灰白色シルトの小ブロックをやや多く含みしまりがよい。層厚は20cmほどで東側に偏ってみられる。C層は褐灰色土で明黄褐色シルトと礫を含む。層厚は厚いところで30cmほど、B層同様、遺構の東側部分にのみ堆積する。

調査区西側部分には地業したとみられるラインは確認できるが、壁の立ち上がりは見られず段丘崖に面する東側のみに壁ができる。掘り込みの底面は皿状でほぼ平らで、幅は14.5～16.2mを測るが、石敷が東の壁から8～9mと西の地業ラインに偏っている。

出土遺物は、A層から磨製石斧や埴輪、古代平瓦などが混入するが、須恵器甕、高台付坏身や黒色土器A類坏、土師皿、などの奈良時代後半～平安時代前期の遺物を伴うことから、その頃に整地された可能性が高いと思われる。

5) 第2次発掘調査（図6～22）

第2次調査区は7つの調査区に分かれており、A・B区は独立した調査区、C～G区は南北に120m、東西に80mの範囲にまとまった調査区である。第1面は、北端にあるC区が標高19.9m、南端のG区が標高18.8mで、中世の耕作溝を中心とした遺構と直径0.1～0.2m程度の小規模な柱穴を検出した。同様にA区は標高18.8m、B区は標高18.4mで第1面

の遺構を検出した。

第2面は、弥生時代後期の竪穴・土坑・溝・柱穴などの集落遺構が検出され、CSK-01から弥生時代後期の壺が出土し、CSK-02からも同時期とみられる土器が出土した。調査区全体でみると遺物の出土はそれほど多くなかった。古墳時代では中期の円墳5基・方墳7基が新たに発見された。調査区は、工場の東西南北の地中梁により分断されてはいたが、12基の古墳を復元することができた。古代(飛鳥・奈良時代～平安時代)は、調査区を南北に貫く溝(CSD-01)や柱穴を確認した。弥生時代から古代の遺構は、いずれも第2面で検出しており、一つの遺構面で3つの時代の遺構を調査した。C区の調査区断面ではV層面で柱穴が確認できるため遺構面が3面以上あったことがわかる。しかし、V層は黒色土ベースで、遺構埋土も黒色土であるため、遺構を正確に判断することは容易でないことから地山面で第2面の検出を行った。

12基の古墳の遺構と遺物の概略について、以下に記載する。すべての古墳は、墳丘および埋葬施設が削平されており、周溝のみが確認されたもので埋土から埴輪が出土したものを探査した。(5号墳を除く)また、石材の出土がないことから木棺直葬であったと推察される。

1号墳は円墳で、C区で全体の2分の1東半分を検出した。墳丘規模は直径14.6m、周溝幅3.0～3.9m、周溝の深さ0.3～0.6mを測る。埋土は、黒色～黒褐色土で底面付近で埴輪が多く出土した。断面形は逆台形～皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。周溝は2・3号墳と共有する。切合関係はCSD-01に切られる。出土遺物は、1号墳のCSD-02から大量の埴輪片が出土した。その大半が埴輪円筒埴輪片であるが、完形に復元できた円筒埴輪は4突帯5段で3段目に円形スカシを穿孔する。時期は川西編年IV期に相当する。形象埴輪では人物・動物・鶴・家形・盾などがあり埴輪や須恵器から5世紀後半に位置づけられる。

2号墳は円墳で、C区で全体の4分の1西半部を検出した。墳丘規模は直径11m以上、(推定15m)、周溝幅2.2～4.4m、周溝の深さ0.5mを測る。埋土は、黒色～黒褐色土で底面付近で埴輪が多く出土した。断面形は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。周溝は1号墳と共有する。切合関係はCSD-01に切られる。出土遺物は、DSD-22から須恵器や埴輪の出土が多く須恵器には杯身・杯蓋・壺・平瓶・器台などがあり、時期は5世紀後半のものが大半である。円筒埴輪は4突帯5段で3段目に円形スカシのものが大半だが、一部4段目にスカシがあり、時期は川西編年IV期に相当する。形象埴輪は鶴・動物・人物・家・馬などがあり、埴輪や須恵器から5世紀後半に位置づけられる。

3号墳は円墳で、E区で全体の3分の2南半部を検出した。墳丘規模は直径14.0m、周溝幅2.4m以上で、周溝の深さ0.3～0.4mを測る。埋土は、黒色土でC層から完形のハソウが出土し、断面形は逆台形で、壁は緩やかに立ち上がる。周溝の共有は1号墳と共有するが、幅7mにも及ぶ6号墳の溝との関係は、断面観察によれば6号墳の溝を吸収しているとみられる。出土遺物は、ESD-12から底部径が楕円形になる埴輪片が出土している。この埴輪片は色調が他の埴輪とは異なり茶褐色を呈し、胎土も細かい砂粒を含むが密であり、調整もタテハケのみであることなどから形象埴輪の底部の可能性も考えられる。円筒埴輪の時期は、おおむね川西編年IV期に相当し、ESD-16からやや時代が下るハソウが出土しているが、5世紀後半に位置づけられる。

4号墳は、D区で全体の5分の2を検出した。墳丘規模は直径12.0m、周溝幅2.4～3.3m、周溝の深さ0.7mを測る。埋土は、黒色土でA2層から埴輪が多く出土した。断面形は深

い逆台形で壁は墳丘側が角度をもって立ち上がる。また、推定では7号墳の周溝と重複するが、周溝の共有および切合関係は不明である。出土遺物は、円筒埴輪や須恵器のほかに形象埴輪の鶴の頭部～頸部が出土した。

5号墳は、F区北側で全体の4分の1西半分を検出した。墳丘規模は直径13m以上、周溝幅2.5～3.0m、周溝の深さ0.3mを測る。埋土は黒色土、断面形は逆台形で、周溝の共有はない。切合関係はFSD-01を切る。出土遺物はない。

6号墳は方墳で、C区で全体の2分の1東半分を検出した。墳丘規模は一辺が9.0m、主軸方向はN 10°E、周溝幅2.8～3.8m、周溝の深さ0.3～0.5mを測る。埋土は黒色土、断面形は逆台形で、壁は墳丘側がやや急に立ち上がる。周溝は東側の一部を3号墳に取り込まれている。出土遺物はESD-14からほぼ完形の須恵器の壺が出土したほか、ESD-02から円筒埴輪・形象埴輪、須恵器が出土した。

7号墳はE区で全体の6分の1北半部を検出した。墳丘規模は一辺が推定9.5m以上、主軸方向はN 11°E、周溝幅1.7～2.4m、周溝の深さ0.3mを測る。埋土は黒色土、断面形は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。推定では4号墳の周溝と重複するが、周溝の共有および切合関係は不明である。出土遺物は円筒埴輪や須恵器が出土した。

8号墳はE区中央で全体の6分の1北半部を検出した。墳丘規模は一辺が推定8m以上、主軸方向はN 21°W、周溝幅1.6～1.9m、周溝の深さ0.2mを測る。埋土は黒色土、断面形は逆台形で、壁は緩やかに立ち上がる。周溝の共有はない。出土遺物は円筒埴輪・形象埴輪のほかに、須恵器ハソウや环蓋が出土した。

9号墳はF区南側で全体の6分の1西半部を検出した。墳丘規模は一辺が11.5m、主軸方向はN 4°E、周溝幅1.4～2.0m、周溝の深さ0.3～0.5mを測る。埋土は黒色～黒褐色土、断面形は逆台形で、壁はやや急に立ち上がる。周溝の共有はない。出土遺物はFSD-02を中心須恵器や埴輪といった遺物が出土した。須恵器は5世紀後半に相当し、円筒埴輪もタガの形状が三角形に近い形状を呈するようになるが川西編年IV期におさまるものである。

10号墳はG区北東部で全体の6分の1南半部を検出した。墳丘規模は一辺が7m以上、主軸方向は不明、周溝幅1.0～1.5m、周溝の深さ0.25mを測る。埋土は黒色土、断面形は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。周溝の共有はない。出土遺物は、GSD-12から須恵器や円筒埴輪が出土し、須恵器には6世紀後半に属するものと7世紀前半に属するものがあり、この溝の埋没時期を示していると考えられる。埴輪はおおむね川西編年IV期に属する。

11号墳はG区北東部で全体の3分の2を検出した。墳丘規模は一辺が6.5m以上、主軸方向はN 4°E、周溝幅1.7～4.0m、周溝の深さ0.2～0.3mを測る。埋土は黒褐色土で底面やや上から埴輪が多く出土し、断面形は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。周溝の共有はない。出土遺物はGSD-14から朝顔形埴輪、GSD-13から須恵器壺、GSD-17から須恵器环身が出土した。埴輪はおおむね川西編年IV期に属する。

12号墳はE区北東で全体の4分の1南西部を検出した。墳丘規模は一辺が推定9.4m、主軸方向はN 16°W、周溝幅1.6～1.8m、周溝の深さ0.3～0.5mを測る。埋土は黒色～黒褐色土、断面形は逆台形で、壁はやや急に立ち上がる。周溝の共有はない。出土遺物は円筒埴輪のほか、須恵器壺・环身・ハソウが出土した。

その他に、調査区を南北に貫く溝(CSD-01)は、全長120m以上、幅2.6～3.5m、深さは1.0～1.3m、主軸はN 4°Wを測る。溝の断面形は逆三角形～U字形で、埋土は灰オリー

ブ色シルトに黒褐色土や灰白色粘土ブロックなどがある。底面の高さはC区で標高18.1mで、緩やかな勾配で南側に向かっている。出土遺物は、古墳を破壊しながら伸びているため、埴輪や須恵器の出土が多くみられる。また、他に瓦や羽釜の把手、すり鉢などもわずかにみられるが、全体的に時期の決め手になる遺物に乏しい。

6)まとめ

太田遺跡には従来から弥生時代の集落が広がっていることがわかつっていたが、今回の調査でそのことがあらためて確認された。しかし、それ以上に弥生時代の集落のうえに古墳時代中期の円墳5基・方墳7基が築造されていたことが大きな発見であった。未発見の古墳は、周間に相当数広がっていると考えられる。また、古墳の編年的位置付けにおいては、新修茨木市史第7巻史料編（考古）には、「埴輪はいずれも窯窓焼成によるもので、円筒埴輪編年IV期に位置付けられるが、黒斑が付着するものが一定量含まれる。円筒埴輪は外側調整にヨコハケを施し、段間を等間隔に割り付ける丁寧な作りであるが、最上段は他の段の間隔よりも間延びしたものが多い。埴輪の特徴および須恵器から、方墳がわずかに先行して5世紀中頃に築かれ、続いて円墳がやや遅れて5世紀後半に築かれたものと理解できる。〈中略〉先行する方墳群の築造は、北200mに位置する太田茶臼山古墳（縦体天皇陵）の造営時期と重なるため、総持寺古墳群（総持寺遺跡）と同様に太田茶臼山古墳の被葬者を支えた地域の集団墓として把握できる〈中略〉群集墳の成立過程を考える上で極めて重要といえる。」とある。これに付して、先行する方墳は基本的には周溝は他の古墳と共有しておらず、また墳丘規模も10m未満で、主軸が東寄りの6・7・9号墳、西寄りの8・12号墳、正方位に近い10・11号墳の3つに大きくわかることができる。後出の円墳については、墳丘規模が一回り大きくなり、直径15m未満で、円墳同士で周溝を共有するが方墳とは共有していないケースが多いことから意識した造墓がうかがわれる。

また、第2次調査区西端部では古墳をはじめとする遺構が流水により流された状況が調査でうかがえ、遺跡西側を流れる安威川によるものと想定され、その後の土地利用に影響した可能性があると考えている。古代（奈良時代後半～平安時代前期）と推定される南北に延びる幅5～6mの石敷遺構（SF-01）が、遺跡東側で見つかった。東の段丘崖上には太田庵寺跡、北には太田茶臼山古墳や今城塚古墳の前を通る西国街道があり、南をみれば総持寺・総持寺北遺跡の古代建物群が接することから、用途ははっきりしないが、地業されていることから、道路遺構ではないかと考える。さらに調査区を南北に貫く大溝（CSD-01）は、第1面の検出時に確認されていないことから、鎌倉以前の奈良時代から平安時代の頃と思われ、五社井堰との関連もあると推測される。

以上のことから、今回の調査は古墳をはじめ、古代の太田にとってたいへん貴重で価値のある発見の多い調査であった。

参考文献

平成26年3月「新修茨木市史 第7巻 史料編 考古」茨木市

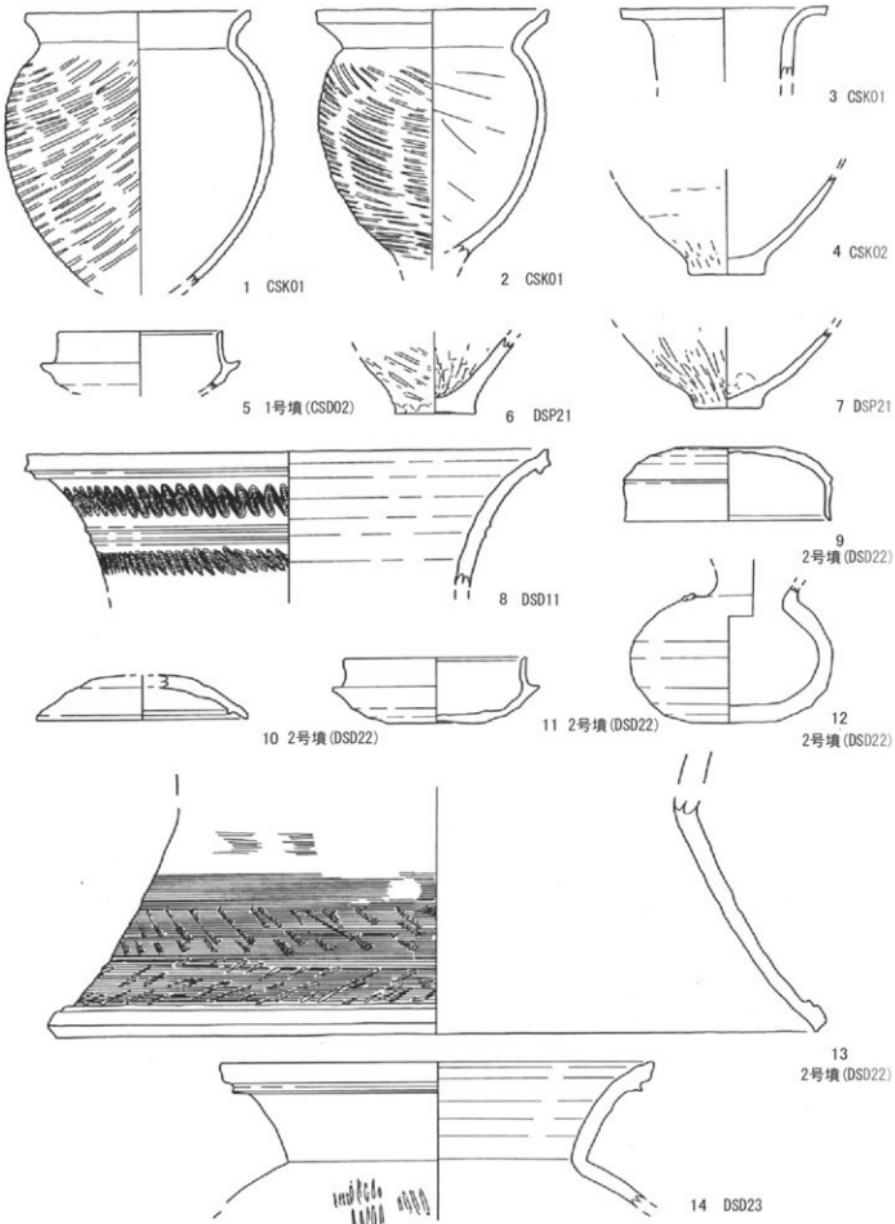


图 12 出土遗物 1

0 5 10cm

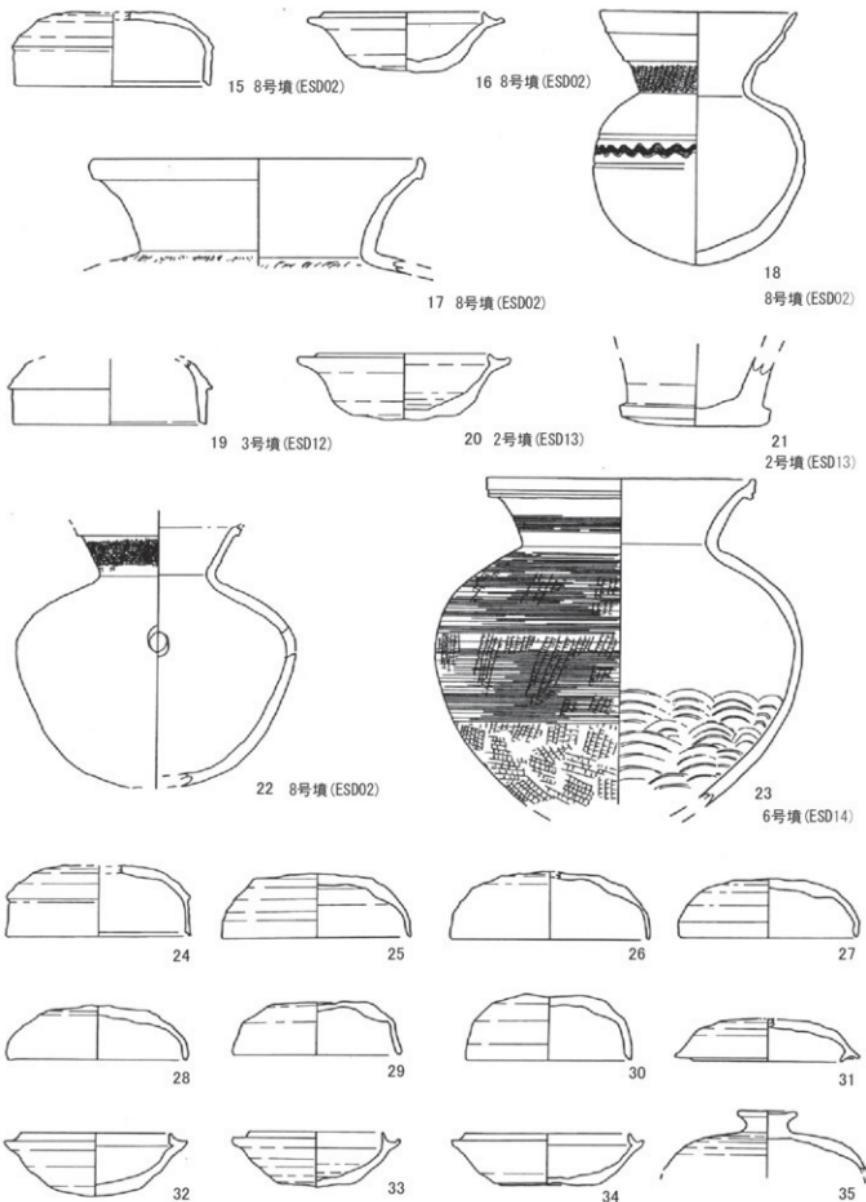
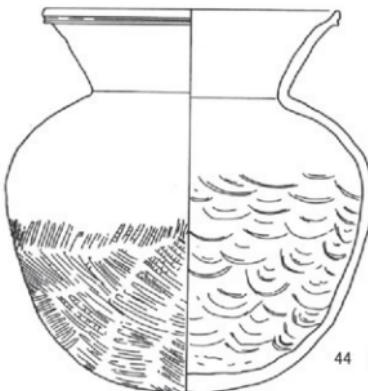
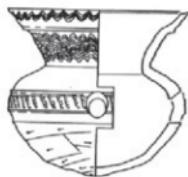
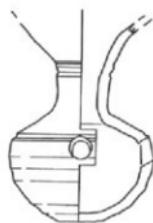
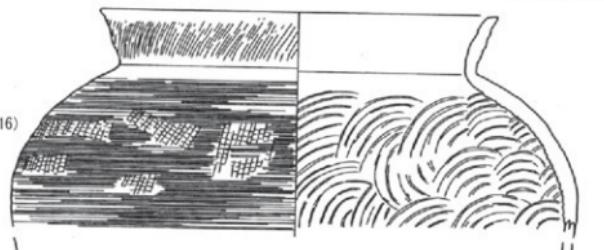
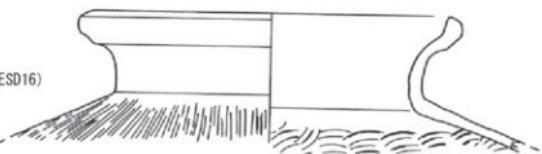
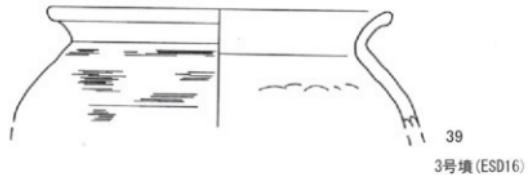
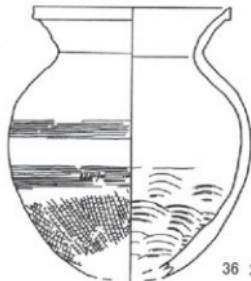


図 13 出土遺物 2

0 5 10cm



0 5 10cm

図14 出土遺物3

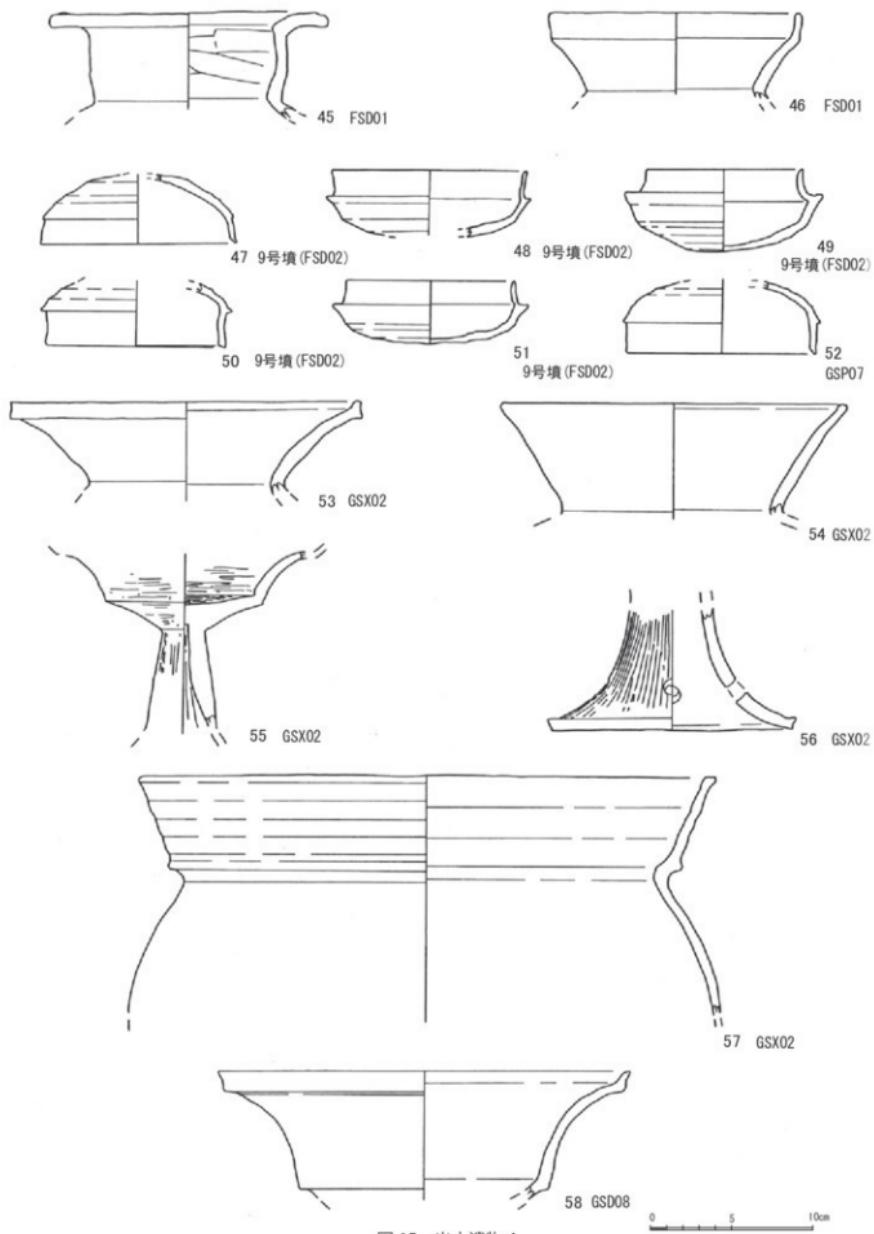
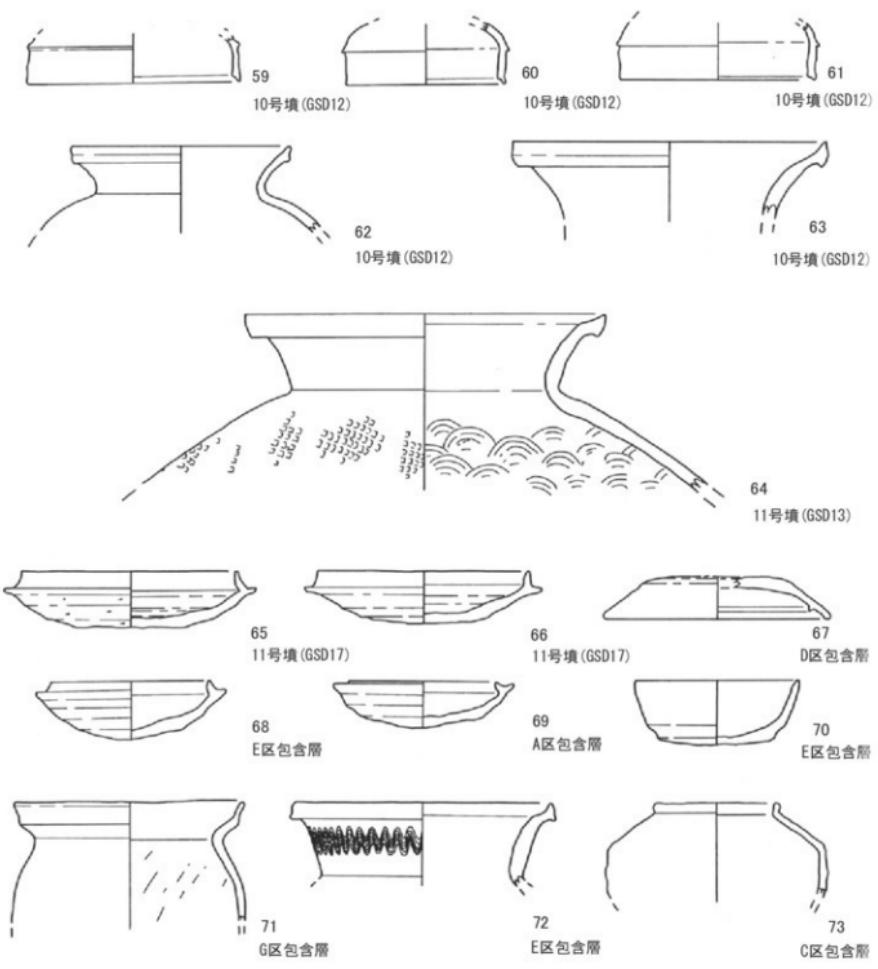


図 15 出土遺物 4



0 1 2 3 4 5 10cm

図 16 出土遺物 5

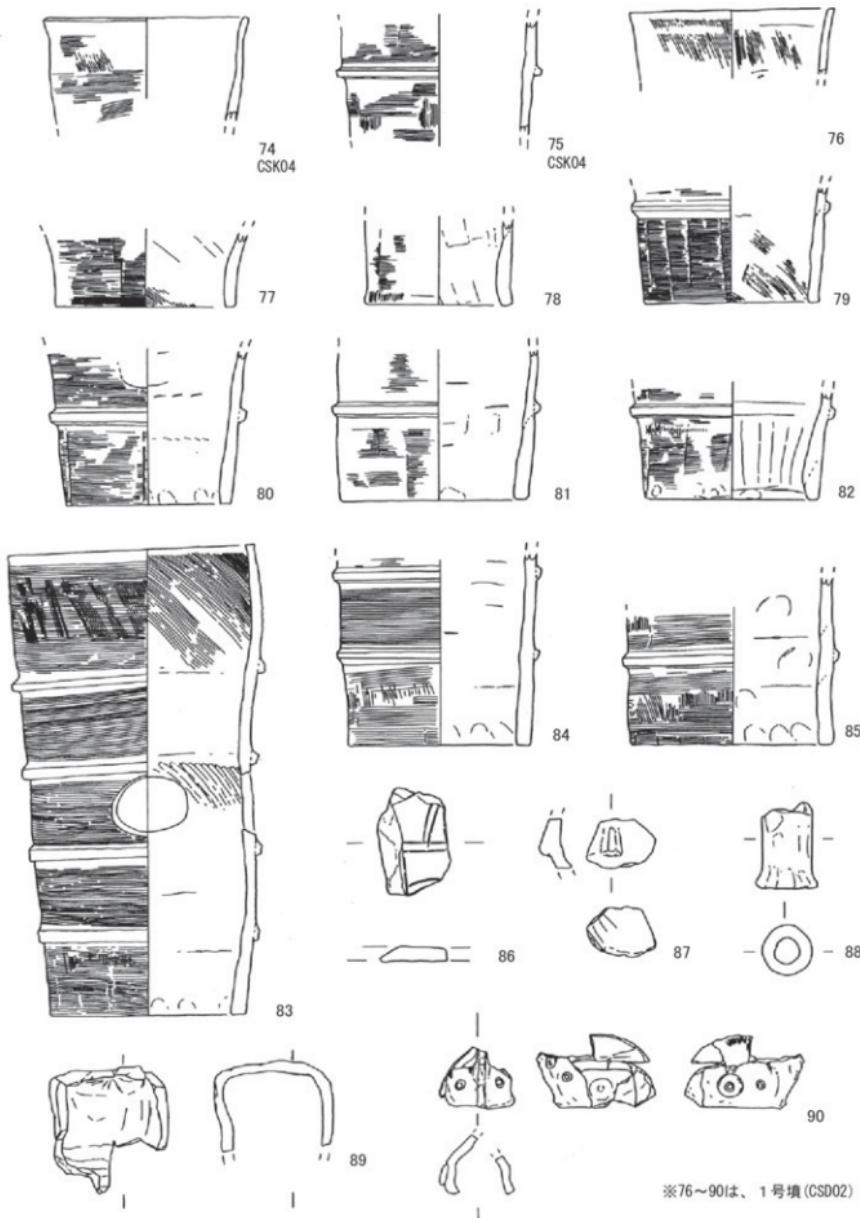


図17 出土遺物6

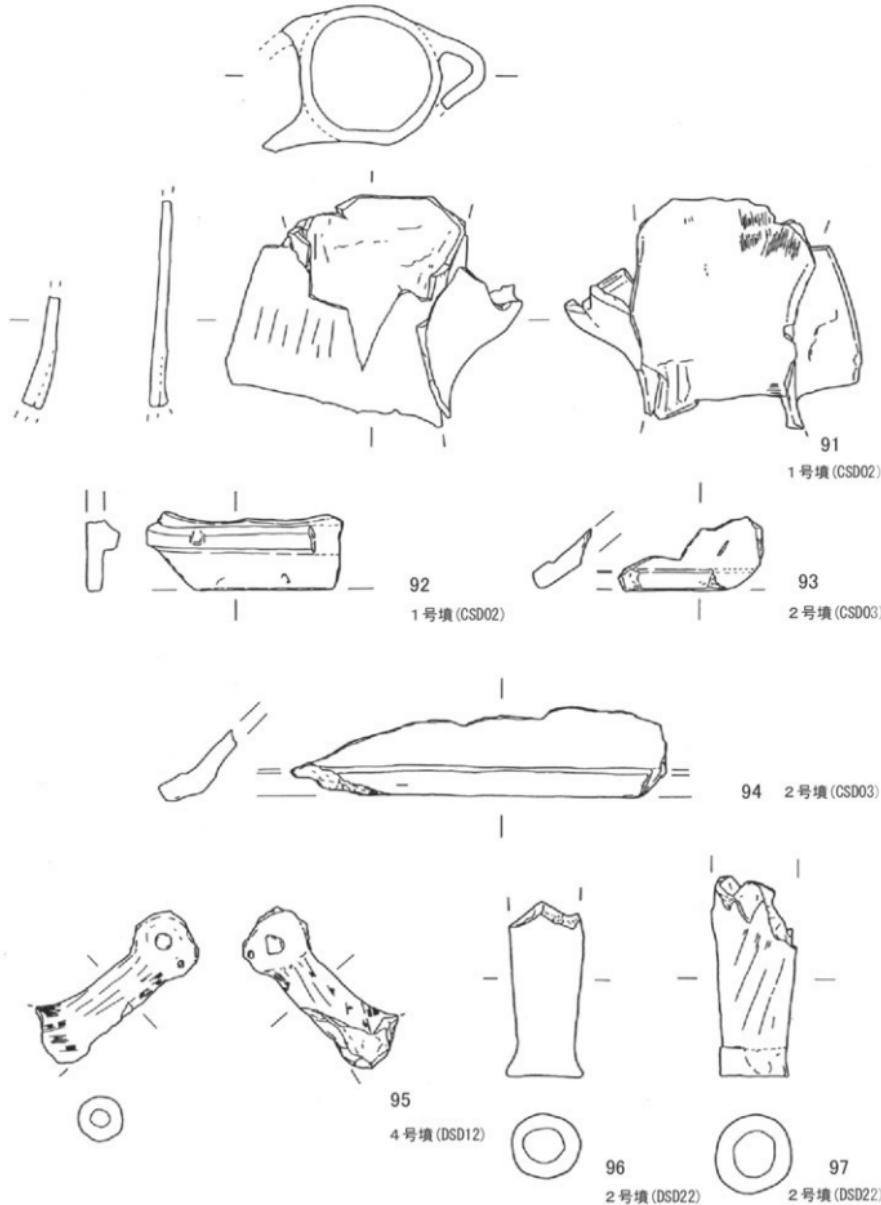
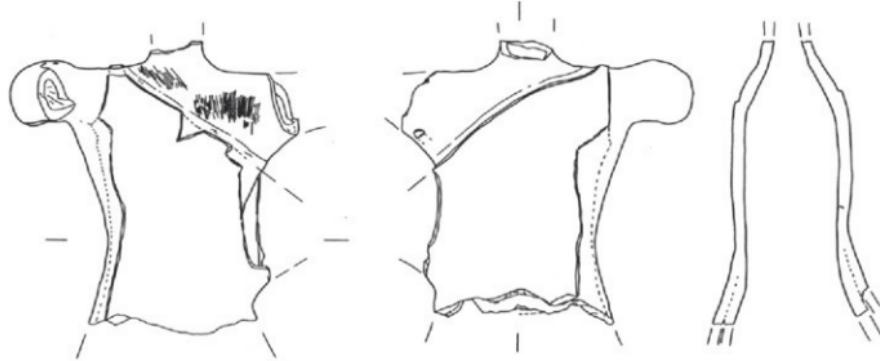
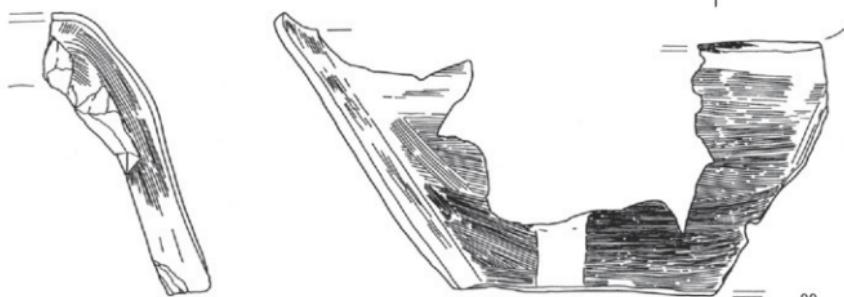
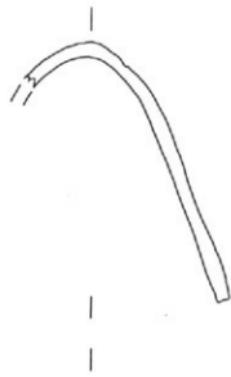


図 18 出土遺物 7



98 2号填(DSD22)



99 2号填(DSD22・23)

図19 出土遺物8

0 10 20cm

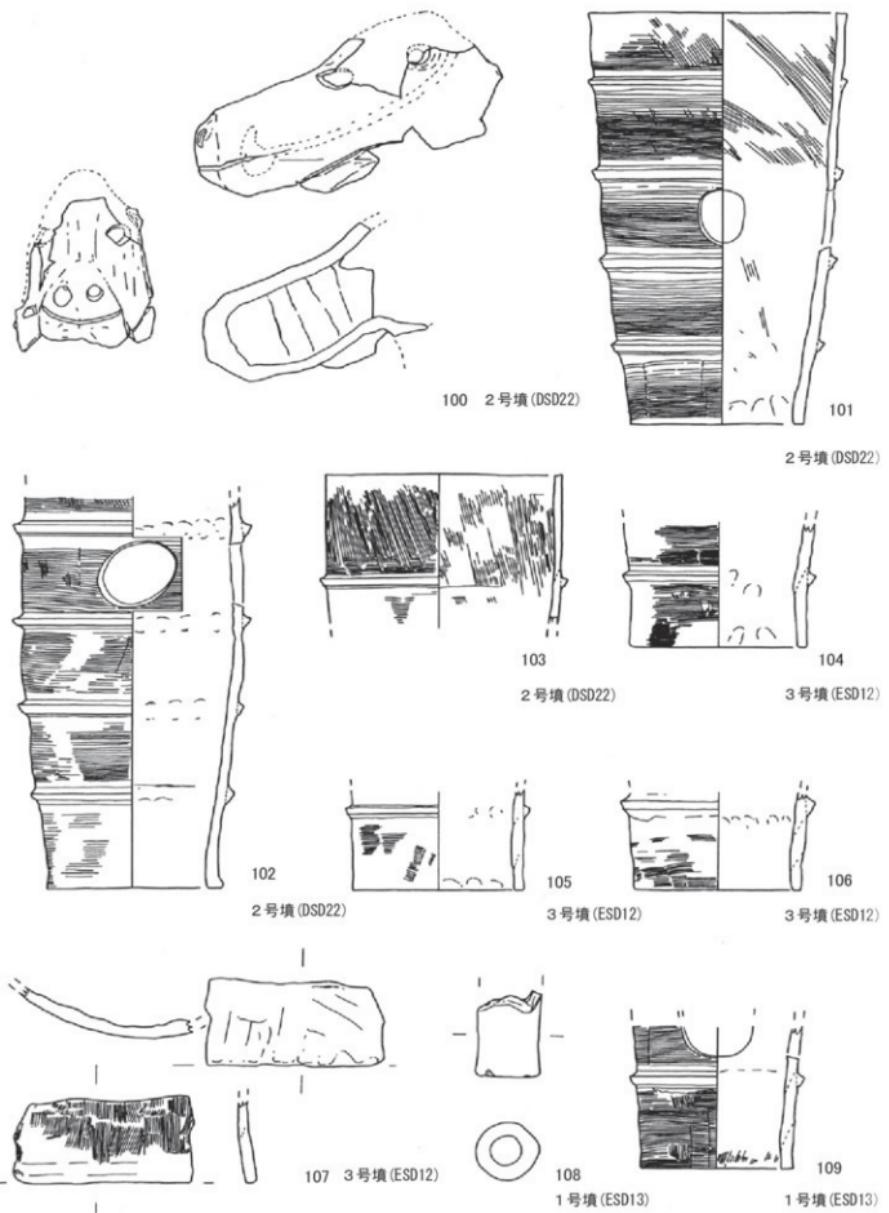
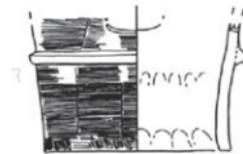


图 20 出土遗物 9

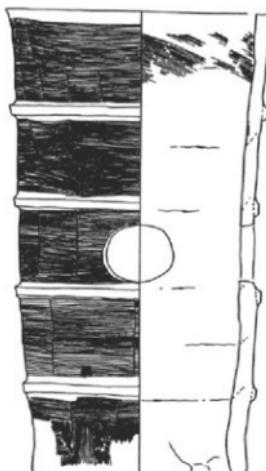
0 10 20cm



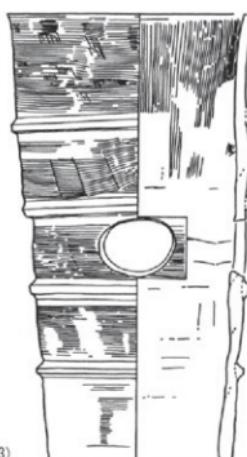
110 1号填(ESD13)



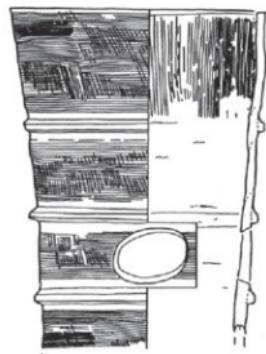
111 1号填(ESD13)

112
1号填(ESD13)

113 1号填(ESD13)



114 1号填(ESD13)



1号填(ESD13)

116
3号填(ESD16)117
12号填(ESD17)118
E区包含层

3号填(ESD16)

图 21 出土遗物 10

0 10 20cm

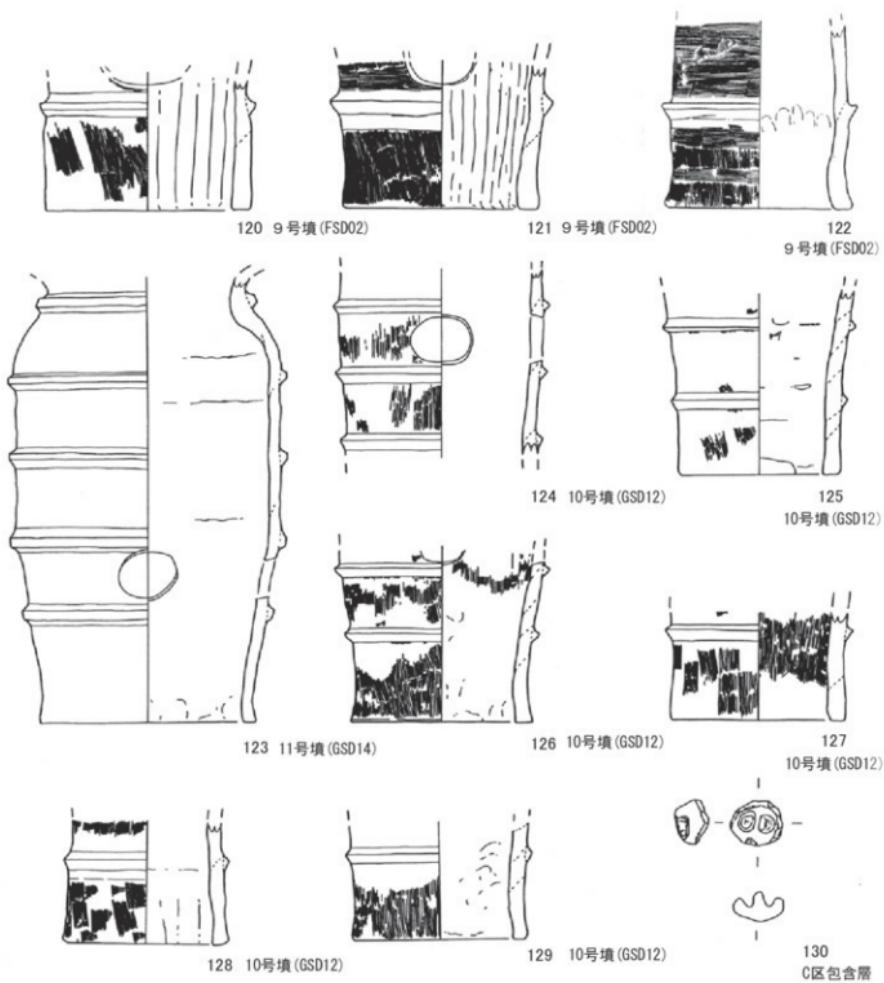


図22 出土遺物 11

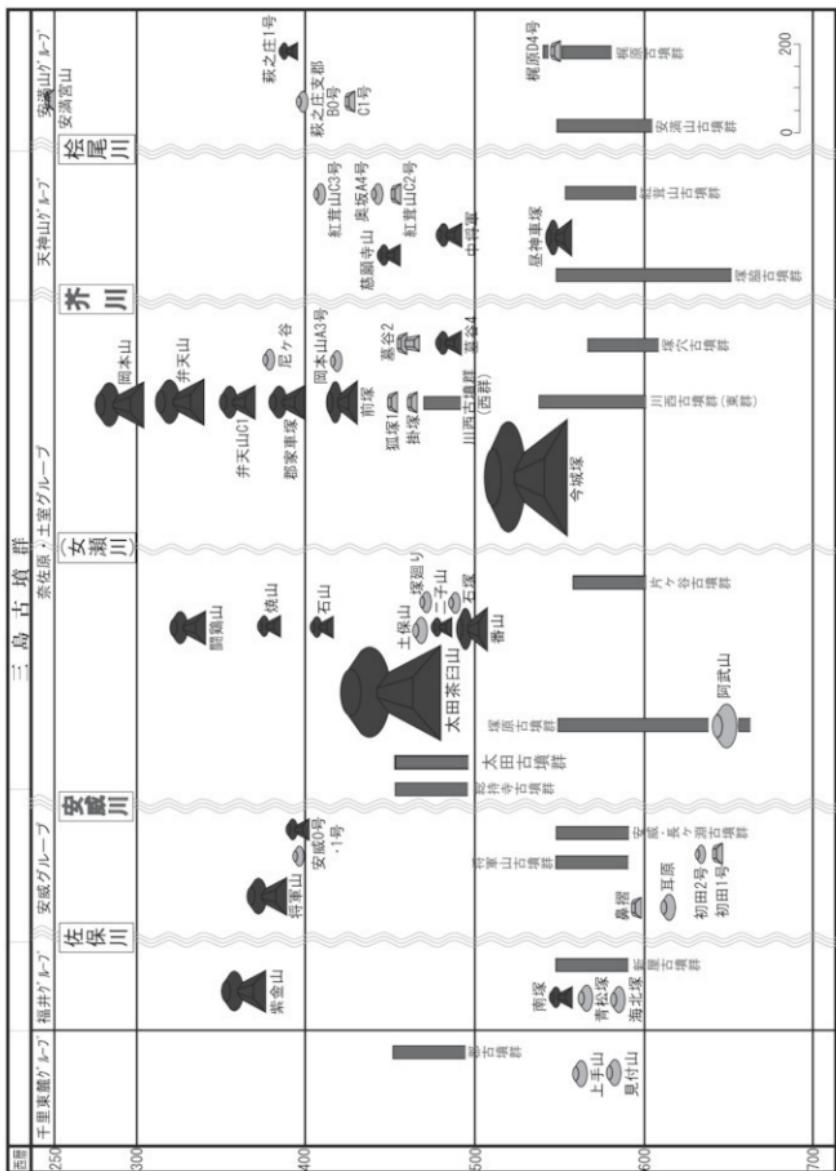


図23 三島古墳群編年図

[図4]「三島古墳群の成り立ち」を一部加除した「三島古墳群の成り立ち」

表1 出土遺物観察表1

認定番号	No.	遺構名	検出面層位	種類	器種	法量(残存長)			調整		色調		胎土	焼成	備考
						口径	底径	高さ	内面	外面	内面	外面			
国12	1	CSK01	埋土内	陶生土器	甕	13.8	—	17	ナデ	タタキ	10YR8/4 浅黄褐色	7.5YR8/6 浅黄褐色	1~2mmの 繊維多く含む	良好	焼津V~VI
国12	2	CSK01	埋土内	陶生土器	甕	14	—	15.5	板ナデ	タタキ	7.5YR8/6 浅黄褐色	7.5YR7/6 浅黄褐色	1~2mmの 繊維多く含む	良好	焼津V~VI
国12	3	CSK01	埋土内	陶生土器	甕	12.4	—	4.4	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄褐色	5YR7/6 紺色	精緻	良好	焼津V~VI
国12	4	CSK02	埋土内	陶生土器	甕	—	8.4	6	ナデ	ナデ+ 底部へラケズリ	7.5YR7/6 紺色	5YR7/6 紺色	1~2mmの 白色砂粒多く含む	良好	西JMI
国12	5	CSD02 (古墳)	埋土内	須恵器	杯身	10	—	3.5	ナデ	ナデ+ 底部へラケズリ	N4/0灰白色	2.5Y5/1 黄灰色	精緻	硬	TK23~ TK47
国12	6	DSP21	第2横 表面	陶生土器	甕	5	—	4.3	板状工具によ るナデ	タタキ+ 被熱跡あり	2.5Y3/1 黒褐色	2.5Y7/3 浅黄色	精緻	良好	焼津V~VI
国12	7	DSP21	第2横 表面	陶生土器	甕	4	—	4.5	ナデ	ミガキ	2.5Y8/2 灰白色	10YR8/3 浅黄褐色	1mmの砂粒 多く含む	良好	西JMI
国12	8	DSD11	第1横 表面	須恵器	縦またたは 甕	31.6	—	10.5	ナデ	ヘラガキ (波状文)	N5/0 灰色	N5/0 灰色	精緻	硬	
国12	9	DSD22 (アゼ西)	第2横 表面	須恵器	杯蓋	12	—	4.5	ナデ	ヘラケズリ	5Y7/1 灰白色	N5/0 灰色	精緻	硬	TK23~ TK47
国12	10	DSD22 (アゼ)	第2横 表面	須恵器	杯通	13	—	3.7	ナデ	ヘラケズリ	N6/0灰白色	N6/0灰白色	黑色砂粒含 む	硬	TK209~ TK217
国12	11	DSD22 (アゼa北側)	第2横 表面	須恵器	杯身	11	—	4	ナデ	ヘラケズリ	10YR6/1 灰白色	2.5Y5/1 黄灰色	精緻	硬	飛鳥II~III
国12	12	DSD22 (アゼ東)	第2横 表面	須恵器	平瓶	—	5	10.5	ナデ	ナデ	N6/0 灰白色	N6/0 灰白色	精緻	硬	
国12	13	DSD22 (アゼ東)	第2横 表面	須恵器	蓋台	—	46.4	13.6	ナデ	カキメのち ヘラガキ	N4/0 灰白色	N6/0 灰白色	精緻	硬	TK208
国12	14	DSD23 (アゼ南)	第2横 表面	須恵器	甕	26.6	—	13.4	ナデ・タタキ	タタキのちナデ	N5/0 灰白色	N5/0 灰白色	2mmの繊維 多く含む	硬	
国13	15	ESD02	第2横 表面	須恵器	杯蓋	12	—	4.5	ナデ	ヘラケズリ	N6/0灰白色	N6/0 灰白色	精緻	硬	TK23~ TK47
国13	16	ESD02	第2横 表面	須恵器	杯身	9.8	—	3.6	ナデ	ヘラケズリ	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	精緻	不良	TK209~ TK217
国13	17	ESD02	第2横 表面	須恵器	甕	10	—	6.2	ナデ+ 同心円タタキ	ナデ+ 格子目タタキ	N5/0 灰白色	N5/0 灰白色	精緻	硬	
国13	18	ESD02	第2横 表面	須恵器	ハソウ	12	—	15.4	ナデ	ナデ+ 波状文	10Y5/1 灰白色	N4/0灰 白色	精緻	硬	TK23~ TK47
国13	19	ESD12 (アゼ北)	第2横 表面	須恵器	杯蓋	12	—	4	ナデ	ヘラケズリ	N7/0 灰白色	N7/0 灰白色	精緻	硬	TK23~ TK47
国13	20	ESD13 (アゼ東)	第2横 表面	須恵器	杯身	10.4	—	4	ナデ	ヘラケズリ	2.5Y8/1 灰白色	N6/0 灰白色	精緻	硬	TK209~ TK217
国13	21	ESD13 (アゼ西)	第2横 表面	須恵器	すり鉢	—	4	9	ナデ	ナデ	N7/0 灰白色	N4/0 灰白色	精緻	硬	
国13	22	ESD02	第2横 表面	須恵器	ハソウ	—	—	15.8	ナデ	ナデ+波状文	N6/0 灰白色	N6/0 灰白色	精緻	硬	

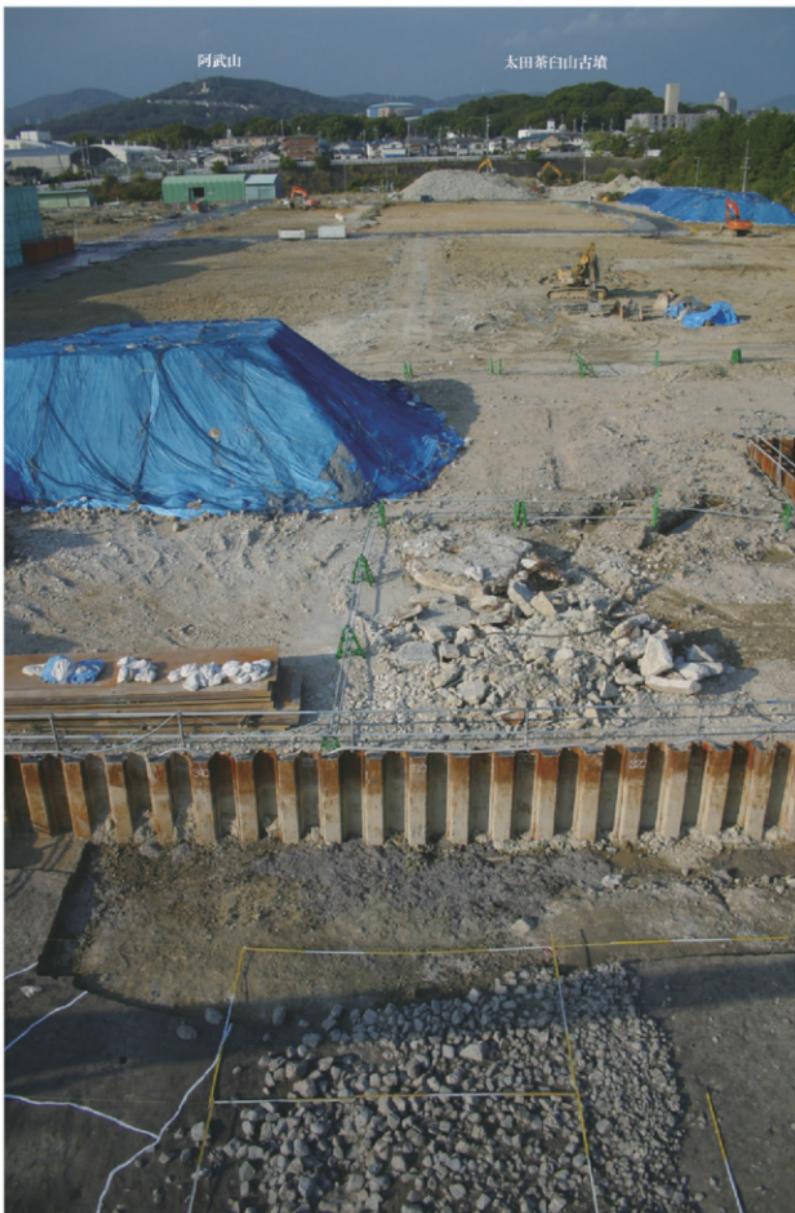
認定番号	No.	通構名	模出面層位	種類	器種	法量(残存長)			調整		色調		触土	焼成	備考
						口径	進径	器具	内面	外面	内面	外面			
國 13	23	ESD14	第2 檻 出面	蒸煮器	壺	16	—	20	同心円タタキ	格子目タタキの ちカキメ	N5/0 灰色	N4/0 灰色	精緻	硬	自然釉付着
國 13	24	ESD16 (北東)	第2 檻 出面	蒸煮器	杯蓋	11	—	4.2	ナデ	ヘラケズリ	N5/0 灰色	N5/0 灰色	精緻	硬	TK47
國 13	25	ESD16 (アゼ西)	第2 檻 出面	蒸煮器	杯蓋	11.5	—	3.9	ナデ	ナデ	10Y7/1 灰白色	10Y7/1 灰白色	精緻	不良	TK43 ~ TK209
國 13	26	ESD16 (アゼ西)	第2 檻 出面	蒸煮器	杯蓋	12	—	4	ナデ	ヘラケズリ	N5/0 灰色	N5/0 灰色	精緻	硬	TK43 ~ TK209
國 13	27	ESD16 (アゼ西)	第2 檻 出面	蒸煮器	杯蓋	11	—	3.3	ナデ	ヘラケズリ	N6/0 灰色	N6/0 灰色	精緻	硬	TK 4.3 ~ TK209
國 13	28	ESD16 (アゼ)	第2 檻 出面	蒸煮器	杯蓋	11	—	5.6	ナデ	ナデ	N6/0 灰色	N6/0 灰色	精緻	硬	TK43 ~ TK209
國 13	29	ESD16 (アゼ東)	第2 檻 出面	蒸煮器	杯蓋	10.2	—	3.2	ナデ	ヘラケズリ	N6/0 灰色	2.5Y5/1 黄灰色	精緻	硬	TK43 ~ TK209
國 13	30	ESD16 (アゼ西)	第2 檻 出面	蒸煮器	杯蓋	10	—	3.9	ナデ	ナデ	N5/0 灰色	N6/0 灰色	2 mmの薄い む	硬	TK43 ~ TK209
國 13	31	ESD16(ア ゼ西)	第2 檻 出面	蒸煮器	杯蓋	9	—	2.6	ナデ	ヘラケズリ	N6/0 灰色	N6/0 灰色	精緻	硬	TK217・つま み剥離跡あり
國 2	32	ESD16 (アゼ西)	第2 檻 出面	蒸煮器	杯身	9	—	3.8	ナデ	ナデ	2.5Y8/1 灰白色	2.5Y8/1 灰白色	精緻	不良	TK43 ~ TK209
國 13	33	ESD16	第2 檻 出面	蒸煮器	杯身	8	—	3.4	ナデ	ヘラケズリ	N6/0 灰色	N6/0 灰色	精緻	硬	TK43 ~ TK209
國 13	34	ESD16	第2 檻 出面	蒸煮器	杯身	10	—	3	ナデ	ヘラケズリ	N7/0 灰色	N7/0 灰色	精緻	硬	TK43 ~ TK209
國 13	35	ESD16 (北東)	第2 檻 出面	蒸煮器	有蓋 高杯 蓋	—	—	3.6	ナデ	ヘラケズリ	N5/0 灰色	N5/0 灰色	精緻	硬	TK43 ~ TK209
國 14	36	ESD16 (アゼ西)	第2 檻 出面	蒸煮器	壺	10	—	16.5	同心円タタキ	ヘラケズリ・タ タキ	N6/0 灰色	N6/0 灰色	精緻	硬	
國 14	37	ESD16 (北東)	第2 檻 出面	蒸煮器	有蓋 高杯	9.8	9	10.2	ナデ	ヘラケズリ	N5/0 灰色	N5/0 灰色	精緻	硬	TK23 ~ TK47
國 14	38	ESD16 (アゼ)	第2 檻 出面	蒸煮器	ハツ ウ	—	—	12	ナデ	ヘラケズリ	N4/0 灰色	N4/0 灰色	2 mmの薄い く含む	硬	TK10
國 14	40	ESD16 (アゼ西)	第2 檻 出面	蒸煮器	廣	22	—	8	同心円タタキ	タタキ	2.5Y6/1 黄灰色	N4/0 灰色	精緻	硬	
國 14	41	ESD16 (アゼ西)	第2 檻 出面	蒸煮器	壺	24	—	13.5	同心円タタキ	格子目タタキの ちカキメ	2.5Y7/1 灰白色	10Y7/1 灰白色	精緻	やや 不良	TK43 ~ TK209
國 14	42	ESD17	第2 檻 出面	蒸煮器	杯身	9.6	—	3.5	ナデ	ヘラケズリ	N7/0 灰色	N7/0 灰色	精緻	硬	TK43 ~ TK209
國 14	43	ESD17	第2 檻 出面	蒸煮器	ハツ ウ	11	—	10.2	ナデ	ヘラケズリ・ タタキ波状文	N6/0 灰色	N6/0 灰色	3 ~ 5mmの 確含む	硬	TK23 ~ TK47
國 14	44	ESD17	第2 檻 出面	蒸煮器	壺	18	—	24.5	同心円タタキ	格子目タタキの ちナデ	10Y5/2 オリーブ灰色	5Y5/1 灰色	精緻	硬	
國 15	45	FSD01	第2 檻 出面	土師器	壺	17	—	6.2	ナデ	ケズリ	10YR8/2 灰白色	10YR7/2 に近い黃色	2 mmの薄い く含む	良好	

回数 番号	No.	遺構名	種出面 層位	種類	器種	法量(残存長)		調整		色調		胎土	焼成	備考	
						口径	直徑	器高	内面	外面	内面	外面			
回15	46	FSDO1	第2 機出面	土師器	盃	13	—	5.2	ナデ	ナデ	2.5Y8/3 淡黄色	10YR8/4 淡黄褐色	精緻	良好	
回15	47	FSDO2 アゼ(2)南	第2 機出面	須志器	杯蓋	12	—	4.2	ナデ	ヘラケズリ	N5/0 灰色	N5/0 灰色	精緻	良好	TK23～TK47
回15	48	FSDO2 アゼ(2)	第2 機出面	須志器	杯蓋	11.4	—	4.5	ナデ	ヘラケズリ	N5/0 灰色	N5/0 灰色	精緻	良好	TK23～TK47
回15	49	FSDO2 アゼ(2)南	第2 機出面	須志器	杯身	9.6	—	5	ナデ	ヘラケズリ	N5/0 灰色	N5/0 灰色	1～3mmの 縫合む	硬	TK23～TK47
回15	50	FSDO2 アゼ(2) 付近	第2 機出面	須志器	杯身	12	—	4	ナデ	ヘラケズリ	N8/0 灰色	N8/0 灰色	精緻	硬	TK23～TK47 自然釉付着
回15	51	FSDO2 アゼ(2)	第2 機出面	須志器	杯身	10	—	3.9	ナデ	ヘラケズリ	N7/0 灰色	N6/0 灰色	精緻	硬	TK23～ TK47
回15	52	GSP07	第2 機出面	須志器	杯身	11	—	3.7	ナデ	ヘラケズリ	N5/0 灰色	N5/0 灰色	精緻	硬	TK23～TK47
回15	53	GSX02 アゼ東側	第2 機出面	土師器	盃	11	—	5.5	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 に赤い褐色	7.5YR8/4 浅黄褐色	1mmの縫合む	良好	
回15	54	GSX02 アゼ東側	第2 機出面	土師器	盃	10	—	6.5	ナデ	ナデ	7.5YR7/2 灰白色	7.5YR7/4 に赤い褐色	1mmの縫合む	良好	
回15	55	GSX02 アゼ東側	第2 機出面	土師器	高杯	—	—	11	ミガキ	ミガキ	5YR5/1 褐灰色	7.5YR5/2 灰褐色	精緻	良好	
回16	57	GSX02 アゼ	第2 機出面	土師器	盃	35	—	14.5	ナデ	ナデ	7.5YR8/6 浅黄褐色	5YR7/6 褐色	3～5mmの 縫合む	良好	
回16	58	GSD08 アゼ南	第2 機出面	土師器	高杯	25	—	7.7	ナデ	ナデ	7.5YR2/6 浅黄褐色	7.5YR2/6 浅黄褐色	2～3mmの 縫合む	良好	TK23～TK47
回16	59	GSD012 アゼ	第2 機出面	須志器	杯蓋	13	—	2.8	ナデ	ナデ	N7/0 灰色	N7/0 灰色	精緻	硬	TK23～TK47
回16	60	GSD012 アゼ	第2 機出面	須志器	杯蓋	12	—	3.5	ナデ	ナデ	N8/2 灰白色	N7/0 灰色	精緻	硬	TK23～TK47
回16	61	GSD012 アゼ	第2 機出面	須志器	杯蓋	10	—	3.7	ナデ	ナデ	N7/0 灰色	N7/0 灰色	精緻	硬	TK23～TK47 自然釉付着
回16	62	GSD012 アゼ	第2 機出面	須志器	盃	19	—	4.5	ナデ	ナデ	5Y6/1 灰色	2.5Y6/1 灰色	1mmの縫合む 1mm粒含む	硬	
回16	63	GSD012 アゼ	第2 機出面	須志器	盃	17.2	—	5.4	ナデ	ナデ	N6/0 灰色	5Y5/1 灰色	精緻	硬	
回16	64	GSD013 アゼ東	第2 機出面	須志器	盃	22	—	10.4	同心円タキ	格子目タキ	N6/0 灰色	2.5Y5/1 灰色	精緻	硬	TK209～TK217
回16	65	GSD017 アゼ(1)南	第2 機出面	須志器	杯身	13.2	—	3.4	ナデ	ヘラケズリ	N7/0 灰色	N7/0 灰色	3mmの縫 合む		TK209～TK217
回16	66	GSD017 アゼ(1)南	第2 機出面	須志器	杯身	12.8	—	3.2	ナデ	ヘラケズリ	2.5Y7/1 灰色	2.5Y7/1 灰色	精緻	硬	TK217～TK46
回16	67	D区包含層		須志器	杯蓋	14	—	2.5	ナデ	ヘラケズリ	10YR7/1 灰白色	10YR5/1 褐灰色	精緻	硬	飛鳥Ⅲ～Ⅳ
回16	68	E区包含層	第2 機出面	須志器	杯身	9.8	—	3.5	ナデ	ナデ	2.5YR8/2 灰白色	2.5YR8/1 灰白色	精緻	不良	TK209～TK217

図版番号	No.	遺構名	検出面層位	種類	器種	法量(残存長)			調整		色調		地土	焼成	備考
						口径	進深	器高	内面	外面	内面	外面			
図16	69	A区包含層	第2検出面	須恵器	杯身	9	—	2.9	ナデ	ナデ	N5/0 灰色	N6/0 灰色	精緻	硬	TK209～TK217
図16	70	E区包含層	第2検出面	須恵器	杯身	10	—	3.9	ナデ	ナデ	N6/0 灰色	N6/0 灰色	精緻	硬	
図16	71	G区包含層	—	土師器	壺	14	—	7.5	ケズリ	ナデ	7.5YR7/4 に灰・褐色	10YR7/2 に灰・褐色	1～3mmの 疊合む	良好	
図16	72	E区包含層	—	須恵器	壺	15.4	—	4.5	ナデ	ナデ・ ヘラガキ波状文	N5/0 灰色	N5/0 灰色	精緻	硬	
図16	73	C区包含層	第1検出面	須恵器	壺	7.6	—	5.8	ナデ	ナデ	10YR7/1 黄白色	2.5Y5/1 黄褐色	精緻	硬	
図17	74	CS804	理土内	円筒埴輪	口縁部	21	—	11	ナデ	タテハケのちヨコハケ	7.5YR7/6 橙色	10YR5/1 褐灰色	1～3mmの 疊合む	良好	川西編年Ⅳ期・75と 同一個体の可能性
図17	75	CS804	理土内	円筒埴輪	全体部	—	—	11	ナデ	タテハケのちヨコハケ	7.5YR7/6 橙色	10YR5/1 褐灰色	1～3mmの 疊合む	良好	川西編年Ⅳ期・74と 同一個体の可能性
図17	76	CS002 (古墳)	一括土器 (古墳) A)	円筒埴輪	口縁部	21	—	7	タテハケ・ ナデ	タテハケ	2.5YR7/2 灰黄色	2.5YR7/3 浅黄色	1～3mmの 疊合む	良好	川西編年Ⅳ期
図17	77	CS002 (古墳)	一括土器 (古墳) A)	円筒埴輪	底部	—	18	7.5	タテハケ・ ナデ	ヨコハケ	10YR7/3 に灰・黄褐色	7.5YR8/6 浅黄色	4～6mmの 疊合む	良好	川西編年Ⅳ期
図17	78	CS002 (古墳)	理土内	円筒埴輪	底部	—	15	8.6	板ナデ	タテハケのち ヨコハケ	2.5Y6/2 に灰・黄褐色	1～3mmの 疊合む	良好	川西編年Ⅳ期	
図17	79	CS002 (古墳)	理土内	円筒埴輪	底部	—	18	12	タテハケ・ ナデ	タテハケのち ヨコハケ	7.5YR7/4 に灰・褐色	7.5YR7/6 橙色	2～4mmの 疊多く含む	良好	川西編年Ⅳ期
図17	80	CS002 (古墳)	理土内	円筒埴輪	底部	—	17	15.5	ナデ・ 指おさえ	ヨコハケ	7.5YR9/3 に灰・黄褐色	10YR7/4 に灰・黄褐色	2～4mmの 疊多く含む	良好	川西編年Ⅳ期
図17	81	CS002 (古墳)	理土内	円筒埴輪	底部	—	18.4	15.6	ナデ	ヨコハケ	10YR7/4 に灰・黄褐色	10YR7/2 に灰・黄褐色	2～4mmの 疊多く含む	良好	川西編年Ⅳ期
図17	82	CS002 (古墳)	理土内	円筒埴輪	底部	—	18	11	板ナデ	タテハケのち ヨコハケ	2.5Y6/2 灰黄色	10YR7/3 に灰・黄褐色	2～4mmの 疊多く含む	良好	川西編年Ⅳ期
図17	83	CS002 (古墳) アゼ西	理土内	円筒埴輪	口縁部	25	20	48	タテハケ・ ナデ	タテハケのち ヨコハケ	10YR8/4 淡黄色	2.5Y8/2 灰白色	精緻	良好	川西編年Ⅳ期
図17	84	CS002 (古墳)	理土内	円筒埴輪	全体部	—	19	19.5	ナデ	タテハケのち ヨコハケ	7.5YR8/3 浅黄色	10YR8/4 浅黄色	1～3mmの 疊合む	良好	川西編年Ⅳ期
図17	85	CS002 (古墳)	理土内	円筒埴輪	底部	—	20.7	17.1	ナデ・ 指おさえ	タテハケのち ヨコハケ	10YR2/3 浅黄色	2.5Y8/2 灰白色	1～3mmの 疊合む	良好	川西編年Ⅳ期
図17	86	CS002 (古墳)	理土内	形象埴輪	体部	—	—	—	ナデ	ナデのち縦割 色	10YR7/2 に灰・黄褐色	10YR7/2 に灰・黄褐色	1～3mmの 疊合む	良好	盾の部材
図17	87	CS002 (古墳)	理土内	形象埴輪	足	—	—	4.8	ナデ	ナデ	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	精緻	良好	動物足・ヒズメ表現 なし
図17	88	CS002 (古墳)	理土内	形象埴輪	頭部	—	—	—	ナデ	ナデ	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	精緻	良好	人物頭部
図17	89	CS002 (古墳)	理土内	形象埴輪	頭部	—	—	—	ナデ	ナデ	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/1 灰白色	精緻	良好	人物頭部
図17	90	CS002 (古墳)	理土内	形象埴輪	頭部	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR8/2 灰白色	7.5YR8/4 浅黄色	1mmの 疊合む	良好	頭の頭部

図版番号	No.	遺構名	棲出面層位	種類	器種	法量(残存長)		調整		色調		胎土	焼成	備考	
						口径	進深	底高	内面	外面	内面	外面			
図18	91	CSD02 (古墳)	埋土内	形象埴輪	体部	-	-	-	ナデ	ナデ・一部タテハケ	2.5Y7/2灰白 に赤い粉紅色	7.5YR8/6 に赤い粉紅色	1~3mmの 雜合む	良好	人物(坐女) 胸部
図18	92	CSD02 (古墳)	埋土内	形象埴輪	体部	-	-	-	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄粉紅色	10YR8/4 浅黄粉紅色	1~5mmの 雜合む	良好	家形埴輪の 部材
図18	93	CSD03 (古墳)	埋土内	形象埴輪	体部	-	-	-	ナデ	ナデ	10YR 7/2 に赤い黄粉紅色	10YR 7/2 に赤い黄粉紅色	1~3mmの 雜合む	良好	家形埴輪の 部材
図18	94	CSD03 (古墳)	埋土内	形象埴輪	体部	-	-	-	ナデ	ナデ	2.5Y8/3 淡黃色	2.5Y8/3 淡黃色	1mmの雜合 む	良好	家形埴輪の部 材
図18	95	DSD12 (北)	埋土内	形象埴輪	頭部	-	-	-	ナデ	ナデ・ 一部タテハケ	7.5YR7/4 に赤い粉紅色	7.5YR7/4 に赤い粉紅色	1~3mmの 雜合む	良好	馬の頭部
図18	96	DSD22 アゼ	第2棟出面	形象埴輪	-	-	8	18	ナデ	ナデ	7.5YR8/6 浅黄粉紅色	7.5YR8/6 浅黄粉紅色	3mmの雜合 む	良好	動物の足・ヒ ズメ表現なし
図18	97	DSD22 アゼ東	第2棟出面	形象埴輪	-	-	-	22	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄粉紅色	10YR8/4 浅黄粉紅色	1~3mmの 雜合む	良好	動物足(ヒズ メあり)・底 部に黒斑あり
図19	98	DSD22 アゼ	第2棟出面	形象埴輪	体部	-	-	-	ナデ	ナデ	10YR4/1 褐色	10YR4/2 に赤い黄粉紅色	1~3mmの 雜合む	良好	人物(坐女) 胸部
図19	99	DSD22 DSD23	第2棟出面	形象埴輪	-	-	-	-	ナデ	ハケ	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	1~3mmの 雜合む	良好	家形埴輪足組
図20	100	DSD22	第2棟出面	形象埴輪	頭部	-	-	-	ナデ	ナデ	2.5Y8/3 淡黃色	2.5Y8/3 淡黃色	1mmの雜 合む	良好	馬の頭部
図20	101	DSD22	第2棟出面	円筒埴輪	底部～ 口縁部	25.6	17	41.8	タテハケのち ナデ	タテハケのち ヨコハケ	5YR6/9 に赤い粉紅色	5YR7/4 に赤い粉紅色	2mmの雜 多く含む	良好	川西編年Ⅳ期
図20	102	DSD22 アゼ西	第2棟出面	円筒埴輪	底部～ 休部	18	-	40	ナデ・ 指押さえ	タテハケのち ヨコハケ	5YR7/4 に赤い粉紅色	7.5YR7/4 に赤い粉紅色	1~3mmの 雜合む	良好	川西編年Ⅳ期
図20	103	DSD22 アゼ東	第2棟出面	円筒埴輪	口縁部	25.2	-	15	タテハケのち ナデ	ヨコハケのち タテハケ	7.5YR7/8 黃褐色	5YR7/6 粉紅色	精緻	良好	川西編年Ⅳ期
図20	104	ESD12 アゼ北	第2棟出面	円筒埴輪	底部	-	18	17.6	ナデ・ 指押さえ	タテハケのち ヨコハケ	10YR7/2 に赤い黄粉紅色	10YR8/3 黄粉紅色	1~5mmの 雜合む	良好	川西編年Ⅳ期
図20	105	ESD12 アゼ北	第2棟出面	円筒埴輪	底部	-	18	10	ナデ・ 指押さえ	ヨコハケ	7.5YR7/4 粉紅色	7.5YR8/6 浅黄粉紅色	2~4mmの 雜合多く含む	良好	川西編年Ⅳ期
図20	106	ESD12 アゼ北	第2棟出面	円筒埴輪	底部	-	17	11.6	ナデ・ 指押さえ	ヨコハケ	10YR7/3 に赤い黄粉紅色	10YR8/4 浅黄粉紅色	1~5mmの 雜合む	良好	川西編年Ⅳ期
図20	107	ESD12 アゼ	第2棟出面	形象埴輪	底部	-	-	8.4	ナデ	ハケ	10YR8/3 黃褐色	10YR8/2 灰白色	1~5mmの 雜合む	良好	底部の形状が 焼門形を呈し ている
図20	108	ESD13 アゼ西側	第2棟出面	形象埴輪	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	2.5Y8/1 褐色	10YR8/3 浅黄粉紅色	1mmの雜 合む	良好	動物足(ヒズ メなし)・底 部に黒斑あり
図20	109	ESD13 アゼ東	第2棟出面	円筒埴輪	底部	-	16	14.5	タテハケのち ナデ	タテハケのち ヨコハケ	10YR7/2 に赤い黄粉紅色	10YR7/2 に赤い黄粉紅色	1mmの雜 合む	良好	川西編年Ⅳ期
図21	110	ESD13 アゼ東	第2棟出面	円筒埴輪	底部	-	19	13	ナデ・指押さ え	タテハケのち ヨコハケ	10YR7/2に赤 い黄粉紅色	2.5Y8/2灰白 色	1~2mmの 雜合む	良好	黒斑あり
図21	111	ESD13 アゼ東	第2棟出面	円筒埴輪	底部	-	18	13	タテハケのち ナデ	タテハケのち ヨコハケ	7.5YR7/3淡 黃褐色	10YR7/3に赤 い黄粉紅色	1~5mmの 雜合む	良好	IV期
図21	112	ESD13 アゼ北	第2棟出面	円筒埴輪	底部	-	17	9.8	ヨコハケのち ナデ	ヨコハケ	7.5YR8/6淡 黃褐色	7.5YR8/3淡 黃褐色	1~5mmの 雜合む	良好	IV期

認定番号	No.	道名	機出面 部位	種類	器種	法量(残存長)			調整		色調		施工	焼成	備考
						口理	運理	器高	内面	外面	内面	外面			
岡21	113	ESD13ア セ東	第2機 出面	円筒埴輪	底部～ 口縁部	27	22	47.5	ナデ・口縁部 タテハケ	タテハケのち ヨコハケ	2.5YR8/2 淡黄 色	7.5YR8/3 淡 黄褐色	難燃	良好	IV期
岡21	114	ESD13ア セ西	第2機 出面	円筒埴輪	底部～ 口縁部	25.5	18.5	—	ナデ・口縁部 タテハケ	タテハケのち ヨコハケ	2.5YR8/3 淡黄 色	7.5YR7/2 淡 黄褐色	3～7mmの 縫合む	良好	最上段に縫合あ り
岡21	115	ESD13ア セ東	第2機 出面	円筒埴輪	口縁部～ 全体	29	—	27.5	ナデ・口縁部 タテハケ	タテハケのち ヨコハケ	10YR8/4 淡 黄褐色	10YR8/2 に ぶい黄褐色	難燃	良好	最上段に縫合あ り
岡21	116	ESD16ア セ西	第2機 出面	円筒埴輪	底部	—	21	10.8	ナデ	ヨコハケ	7.5YR8/4 淡 黄褐色	10YR8/3 淡 黄褐色	3～5mmの 縫合む	良好	IV期
岡21	117	ESD17ア セ西	第2機 出面	円筒埴輪	底部	—	15.6	11	タタキのちナ デ	ヨコハケ	7.5YR7/3 淡 黄褐色	7.5YR7/4 淡 黄褐色	2～3mmの 縫合む	良好	IV期
岡21	118	E区	E区包含 層	形象埴輪	全体	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR7/2 に ぶい黄褐色	10YR7/2 に ぶい黄褐色	1～4mmの 縫合む	良好	家形埴輪の部材
岡21	119	ESD16ア セ西	第2機 出面	形象埴輪	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	2.5YR8/2 淡 黄褐色	2.5YR8/2 淡 黄褐色	1～5mmの 縫合む	良好	動物足(ヒズメ あり)・底面に 黒斑あり
岡22	120	FSD02ア セ南	第2機 出面	円筒埴輪	底部	—	21	13.3	ナデ	タテハケ	2.5Y7/2 黄 褐色	2.5Y7/2 黄 褐色	2～3mmの 縫合む	良好	IV期
岡22	121	FSD02ア セ南	第2機 出面	円筒埴輪	底部	—	20	15	ナデ	タテハケのち ヨコハケ	7.5YR7/3 淡 黄褐色	2.5Y7/2 黄 褐色	5mmの縫 合む	良好	黒斑あり
岡22	122	FSD02ア セ南	第2機 出面	円筒埴輪	底部	—	19	18.6	ナデ	タテハケのち ヨコハケ	10YR7/3 に ぶい黄褐色	10YR7/4 に ぶい黄褐色	2～3mmの 縫合む	良好	IV期
岡22	123	GSD14ア セ南	第2機 出面	朝顔型 埴輪	底部	—	23	48	ナデ	ナデ	10YR8/3 淡 黄褐色	10YR8/3 淡 黄褐色	1～5mmの 縫合む	良好	IV期
岡22	124	GSD12ア セ	第2機 出面	円筒埴輪	全体	—	—	19	ナデ	タテハケ	7.5YR7/4 に ぶい褐色	7.5YR7/6 褐 色	1mmの縫 合む	良好	IV期
岡22	125	GSD12ア セ	第2機 出面	円筒埴輪	底部	—	16	18.5	ナデ	タテハケ	5YR7/8 褐 色	5YR7/6 褐 色	1～5mmの 縫合む	良好	IV期
岡22	126	GSD12ア セ西	第2機 出面	円筒埴輪	底部	—	18.6	18.5	タテハケのち ナデ	タテハケ	10YR7/2 に ぶい黄褐色	7.5YR7/0 褐 色	3～5mmの 縫合む	良好	IV期
岡22	127	GSD12ア セ西	第2機 出面	円筒埴輪	底部	—	18	11	タテハケのち ナデナデ	タテハケ	10YR7/4 に ぶい黄褐色	7.5YR7/0 褐 色	1mmの縫合 む	良好	IV期
岡22	128	GSD12ア セ西	第2機 出面	円筒埴輪	底部	—	17	12.5	ナデ	タテハケ	10YR7/4 に ぶい黄褐色	5YR7/8 褐 色	1mmの縫合 む	良好	IV期
岡22	129	GSD12ア セ西	第2機 出面	円筒埴輪	底部	—	18	11.7	ナデ	タテハケ	7.5YR7/8 黄 褐色	5YR6/8 褐 色	1～5mmの 縫合む	良好	IV期
岡22	130	C区	包含層	形象埴輪	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/8 黄 褐色	7.5YR8/8 黄 褐色	1～5mmの 縫合む	良好	動物頭部部分



石敷俯瞰（南から）

図版2

第1次調査区



全景（西から）



石敷断面状況（北西から）

図版3 第1次調査区



図版4

第1次調査区



石敷全景（北から）



石積状況（北から）

図版 5
第1次調査区



調査区全景（西から）



石敷全景（西から）

図版6

第2次調査区



俯瞰（北から）



俯瞰（南から）

図版7 第2次調査区



A · B 調査区全景（北西から）



A · B 調査区全景（西から）

図版 8

第2次調査区



A区全景（北東から）



A区遺構検出状況（南から）

図版9 第2次調査区



C区俯瞰（北から）



C区全景（西から）



C区遺構検出状況（南西から）



1号填土層断面（東から）



D・E区俯瞰（南から）



D・E区全景（東から）



E区全景（南から）



G区全景（南から）



E区全景（西から）



E～G区俯瞰（西から）



F区全景（真上から）



9号填全景（北から）



D区全景（南から）



大溝〔CSD-1〕土層断面（北から）



C S K - 1 遺物出土状況



1号填北側周溝埴輪出土状況（南から）



1号墳検出状況（北から）



1号墳南側周溝埴輪出土状況（西から）



4号墳周溝鶏形埴輪出土状況



左 6号墳・右 12号墳／遺物番号 23・44



1号墳—遺物番号 83



2号墳—遺物番号 102



2号墳一遺物番号 98



2号填—遺物番号 99

図版
24

馬形埴輪



2号墳一遺物番号 100

報告書抄録

ふりがな	おおだいせきはくつちょうさがいほう
書名	太田遺跡発掘調査概報
シリーズ名	茨木市文化財資料集
シリーズ番号	第61集
編著者	黒須靖之 関 桦（～平成25年9月）
編集機関	茨木市教育委員会
所在地	〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号
発行年月日	平成27年（2015）3月31日

所収遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
太田遺跡〔OT08-1・2〕	太田東芝町	34° 50' 20"	135° 34' 42"	H20.10.2～ H20.11.6 (第1次) H20.12.8～ H21.3.28 (第2次)	364m ² 6,010m ²	土壤改良工事

所収遺跡	種別	主な時代	遺構	遺物	特記
太田遺跡〔OT08-1・2〕	集落跡	弥生時代～室町時代	〔弥生時代〕溝、土坑 〔古墳時代〕円墳5基 方墳7基 〔古代〕大溝 石敷遺構 〔平安後期～室町時代〕耕作溝、柱穴	弥生土器 磨製石斧 埴輪（円筒・巫女・人物顔・鶴・家） 須恵器 (甕・高台付壙身) 土師器(壺・甕) 平瓦 青磁碗 綠釉陶器 瓦器 土師皿	第1次調査区では、幅5～6mの南北方向にのびる石敷遺構を確認した。石敷を覆う堆積土内から埴輪片とともに須恵器高台付壙身、土師器盤皿が出土。古代の遺構で、北に300mほどで太田茶臼山古墳群西付近の西国街道に達する。また、第2次調査区では直径15m程の円墳と一辺10m程の方墳で構成される古墳群を確認した。さらに、古墳群を横して南北に120m以上のびる幅2～3mの溝を確認した。

太田遺跡発掘調査概報

茨木市文化財資料集 第61号

発行日 平成27年3月31日

発行 茨木市教育委員会

印刷 株式会社トウユー